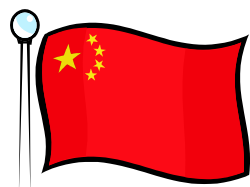


2010 年度教師海外研修 研修報告書・授業実践集



派遣国：中華人民共和国



2011 年 2 月

独立行政法人国際協力機構 兵庫国際センター
(JICA 兵庫)

後援： 外務省、文部科学省、兵庫県教育委員会、
神戸市教育委員会、社団法人兵庫県私学総連合会

兵庫七

JR

11-001

はじめに

グローバル化が急速に進む現在、地球規模で様々な問題を抱えています。世界で頻発するテロ・自然災害・感染症や開発途上国が抱える貧困などの多くの問題は、私たちの生活と決して無関係ではありません。学校現場においても、従来の国際理解教育にとどまらず、これら地球規模の諸問題について主体的に取り組む地球市民を育てる開発教育がますます重要になってきています。独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター（以下「JICA 兵庫」という。）は、教育現場からのニーズに応じる形で、兵庫県内の学校などの教育機関を対象に、開発教育支援業務を実施しています。JICA の考える開発教育とは、開発途上国の現状やそれらの国々が抱える開発問題について深く理解し、開発途上国と先進国の関係を含め、国際社会の問題の解決に向けて何らかの形で参加する態度を養うための教育です。JICA 兵庫は、兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会などと連携しながら、次代を担う児童・生徒の育成のために様々なプログラムを用意しています。JICA ボランティア（青年海外協力隊・シニア海外ボランティア）など経験者・JICA 職員・専門家などを講師派遣する「JICA 国際協力出前講座」、児童・生徒が JICA 兵庫を訪問して学ぶ「JICA 兵庫訪問プログラム」、主に教員を対象とする「開発教育指導者セミナー」、そして本件の「教師海外研修」です。

JICA の教師海外研修は、単なる視察旅行ではなく、開発途上国で国際協力の現場や現地の人々の生活を視察し、その国の抱える開発問題に触れ、また、人々との交流を通して生活・文化の多様性を知ることができる研修です。教師海外研修で得た経験から気づき、感じたことを、児童・生徒及び同僚の学校教員に対して、授業やクラブ活動を通じて還元することを目的としています。そして現在、この教師海外研修に参加した教員が有志で OB 勉強会を立ち上げ、年に数回、独自に研究会を行っています。このように、海外研修を経験した教員同士が学び合い、お互いの経験を共有し、さらには地域で発信しているのです。開発教育の普及と促進には、教育現場で活躍する教員の力が不可欠です。今後もそうしたネットワークが継続し、地域での開発教育の指導者として、その経験を大いに発揮してくださることを期待します。

2010 年度は、8 人の教員を中華人民共和国に派遣し、8 泊 9 日の中国滞在を通して、国際協力のあり方、日本から見た中国、中国から見た日本、環境問題など、多くのことについて学び、感じ、考えていただきました。また、本研修後は、その学びを児童・生徒に伝えるため、創意工夫した実践授業を行っております。

本報告書は、教師海外研修参加教員による帰国後の授業実践の教材をまとめたものです。本書が開発教育（国際理解教育）に関心をお持ちの教員の方々の一助となれば、幸いです。

2011 年 2 月
独立行政法人国際協力機構
兵庫国際センター
所長 伊禮 英全

目次

はじめに	1
------------	---

【第1部】教師海外研修概要

1-1 教師海外研修の趣旨	3
1-2 教師海外研修の目的	3
1-3 2010年度教師海外研修の日程	4
1-4 2010年度海外研修の概要	4
【写真特集】中国で見たこと、感じたこと	6

【第2部】研修報告

2-1 事前研修	10
2-2 海外研修 訪問先所感	11
2-3 事後研修	14

【第3部】授業実践集

実践 1 「はっけん！たいけん！中国」 上田 友美子（神戸市立神陵台小学校）	16
実践 2 「近くの国を調べよう」 投石 悠一（伊丹市立鴻池小学校）	24
実践 3 「世界の中の日本とわたしたち」 吉田 愛香（神戸市立霞ヶ丘小学校）	32
実践 4 「メディアから環境を考える」 奥内 正浩（明石市立野々池中学校）	40
実践 5 「『違い』を知って作る『自分のものさし』」 阿部 恵子（兵庫県立夢野台高等学校）	48
実践 6 「内モンゴルの砂漠化について考える」 澤武 潤子（甲南高等学校）	56
実践 7 「真の日中理解のために」 吉井 吏（兵庫県立宝塚西高等学校）	64
実践 8 「中国人と日本人のものの見方の違いについて」 永峰 恵介（兵庫県教育委員会事務局）	72

【第4部】成果と課題

4-1 海外研修を終えて	79
4-2 同行者の視点から一言	83

【参考資料】

JICA とは	85
JICA 兵庫の開発教育支援事業紹介	86

本報告書に記載されている意見は、本研修参加者によるものであり、JICA を代表するものではありません。

【第1部】教師海外研修概要

1-1 教師海外研修の趣旨

本研修は、国際協力に関心があり、授業やクラブ活動などで開発教育や国際理解教育を実践している小学校・中学校・高等学校の教師及び教育委員会の指導主事を対象に、開発途上国で国際協力の現場や現地の生活実態を視察し、今後の授業に役立てる機会を提供することを目的とした研修プログラムです。

兵庫県からの研修参加実績

年度	参加者数	研修国：参加者内訳（人数）		
1996	2	タンザニア：高校（2）		
1997	3	ジンバブエ：中学校（1）	ベトナム：高校（2）	
1998	4	バングラデシュ：中学校（2）	メキシコ：高校（2）	
1999	0			
2000	3	モンゴル：中学校（2）	ケニア：高校（1）	
2001	4	ラオス：中学校（2）	ヨルダン：高校（2）	
2002	2	ドミニカ共和国：中学校（2）		
2003	6	ベトナム：小学校（2）	ラオス：中学校（2）	ケニア：高校（2）
2004	6	フィリピン：小学校（2）/ 高校（2）	ラオス：中学校（2）	
2005	6	タイ：小学校（2）/ 中学校（2）/ 高校（1）/ 教育委員会（1）		
2006	8	スリランカ：小学校（2）/ 中学校（1）/ 高校（3）/ 教育委員会（2）		
2007	8	インドネシア：小学校（4）/ 中学校（1）/ 高校（2）/ 教育委員会（1）		
2008	7	インドネシア：小学校（3）/ 中学校（3）/ 高校（1）		
2009	8	ベトナム：小学校（1）/ 中学校（2）/ 高校（3）/ 特別支援学級（1）/ 教育委員会（1）		
2010	8	中華人民共和国：小学校（3）/ 中学校（1）/ 高校（3）/ 教育委員会（1）		

小学校については、2002年度から開始（2002年度は、兵庫県からの参加者なし。）

1-2 教師海外研修の目的

JICA 事業の視察や JICA ボランティア（青年海外協力隊・シニア海外ボランティア）・専門家などとの意見交換を行い、ODA（政府開発援助）による国際協力事業に対する理解を深める。

現地の学校視察及び教員との意見交換を実施し、中国の教育事情を理解する。

現地の人々との交流を通じて、中国の生活・文化・社会事情を理解する。

日系企業の視察を通じ、日本と中国とのつながりを知る。

帰国後の授業実践に活用できる教材や物品を収集する。

一連の研修を通じて感じたことや体験したことを基に、授業実践計画を作成し、各所属校で開発教育・国際理解教育の授業を実践する。

本研修終了後も、開発教育・国際理解教育を継続して実施し、各所属校及び地域の教員に対して開発教育の普及を推進する。

1-3 2010 年度教師海外研修の日程

2010 年										
4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月 ~ 12 月	1 月	2 月			
4/18	5/21	6/20	7/11	7/29	7/30~8/7	8/9・10	10/17	1/7	2/20	
募集説明会	選考結果通知	第1回事前研修	第2回事前研修	第3回事前研修	海外研修	事後研修	授業実践	授業進捗報告会	授業実践報告書提出	授業実践報告会
<div style="border: 2px solid red; padding: 5px; display: inline-block;"> <b style="color: red;">募集期間 4/1 ~ 5/18 </div>										

1-4 2010 年度海外研修の概要

(1) 派遣国概要

国名：中華人民共和国
 首都：北京
 面積：約 960 万平方キロメートル（日本の約 25 倍）
 人口：約 13 億人
 民族：漢民族（総人口の 92%）及び 55 の少数民族
 言語：漢語（中国語）
 宗教：仏教、イスラム教徒、キリスト教徒など
 通貨：元
 GDP：約 33 兆 5,353 億元（約 4 兆 9,000 億ドル）
 （2009 年中国国家统计局）
 1 人当たりの GDP：約 3,404 ドル（2008 年 IMF）



(2) 派遣国の選定理由

兵庫県には現在約 10 万人の外国籍住民が暮らしている。中国国籍の住民は県内の外国人登録者としては 2 番目に多く、その数は 25,760 人にのぼっている（2009 年 12 月末現在）。中国国籍又は中国にルーツを持つ児童・生徒が在籍する学校も多く、日本語指導が必要な児童・生徒も少なくない。そのため、教師海外研修の派遣先として中国を希望する声が上がっていた。また、メディアによって流される情報に惑わされず、自分の目で実際に中国を見て生徒に伝えたいという声も多く聞かれていた。

以上のような状況に鑑み、中国とのつながりや現状を教員自身が肌で感じて理解することは兵庫県の教育現場において重要であると考え、派遣先を中国に決定した。

(3) 海外研修日程表

順	月 日	曜日	日程	宿泊地
1	7月30日	金	JICA 兵庫 関西国際空港 北京	北京
			JICA 中国人民共和国事務所訪問	
			財団法人自治体国際化協会 (CLAIR) 北京事務所訪問	
2	7月31日	土	ほんたんたん 紅丹丹教育文化交流中心(草の根技術協力事業(草の根協力支援型) 「視覚障害者音声情報提供技術指導事業」) 視察	北京
			北京市内視察	
3	8月1日	日	北京 フフホト	フフホト
			フフホト市内視察	
4	8月2日	月	内モンゴル師範大学訪問・意見交換(青年海外協力隊(日本語教師) 活動現場)	杭錦旗
			フフホト とうきんき 杭錦旗	
			オールドス市杭錦旗中学校訪問・交流(青年海外協力隊(日本語教師) 活動現場)	
5	8月3日	火	「草原における環境保全型節水灌漑モデル事業プロジェクト」杭錦 旗モデル地区視察(内モンゴル自治区杭錦旗水務局・内モンゴル自 治区杭錦旗庫布齊砂漠・内モンゴル自治区杭錦旗錫尼鎮布哈岱村)	杭錦旗
6	8月4日	水	円借款「内蒙古自治区植林植草事業」視察	北京
			オールドス 北京	
7	8月5日	木	「中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト」視察	北京
			北京市内視察(教材・資料購入)	
8	8月6日	金	バンドー化学株式会社(天津)視察	北京
			開発区視察	
			天津市内視察	
9	8月7日	土	振り返り	
			北京 関西国際空港	

中国で見たこと、感じたこと（写真のコメントは、参加者による。）



360度、見渡す限りどこまでも続く乾燥した大地。電気はかろうじて通じるもののインフラが十分とはいえないこの場所で、節水型灌漑事業に携わる現地専門家（阿部）



北京の電子街で見つけた語学の早期教育を勧める看板。右上「早く始めるほど伸びます」左下「大きな結果」というニュアンスの言葉が…。激しい競争社会を垣間見た感じがしました。（阿部）



「死ぬまで緑を植え続けるつもりです。」日本の資金提供を受けた植林事業をライフワークとされる郭さん（写真中央）、砂漠化防止の最前線にある姿は、使命感に裏打ちされ輝いているように思いました。（阿部）

何でもかんでもたくさん積んで走る自転車が多い。自動車やバスのけたたましいクラクションにも負けず、力強くペダルをこいでいる。（上田）



北京市内の路上で勉強している女の子。小さな机と椅子でとても窮屈そうだが、おしゃべりもせずに一生懸命、数学の問題に取り組んでいた。（上田）

街中で見かけた電動自転車。日本のものと違いペダルはバッテリー切れ時の緊急用。免許不要で気軽に乗れるそうです。（ただし街中で走行するのは度胸が必要）。（奥内）



渡航前に中国で使える電源変換プラグの種類がよくわからず、手持の種類をすべて持って行った。結局すべての物が使えました。（何でも使えるようになっていました。）（奥内）

中国で見たこと、感じたこと

北京博愛医院专家出診一覽表 出診時間以當日挂号为准

科室	姓名	职称	专病门诊时间	挂号费
神经内科	丁伯超	主任医师	周五上午	14元
	刘克敏	主任医师	周一、周四下午	14元
	唐 涛	主任医师	周一、周二上午	9元
	孙 康	主任医师	周一全天	14元
	王利清	副主任医师	周三全天	7元
内科	周剑云	副主任医师	周五全天	7元
	孟 申	主任医师	周二下午、周五上午	14元
	杨昭禄	主任医师	周五上午	14元

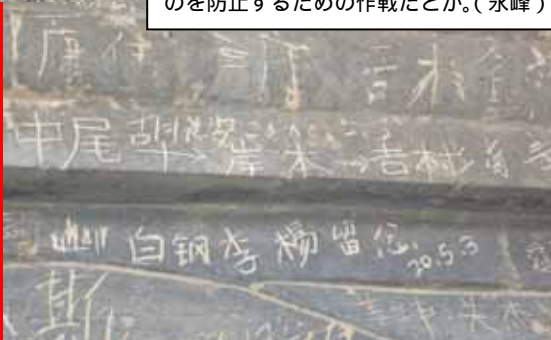
その日の担当医を紹介している掲示板です。有名な先生の診察を受けるために、全国から患者が集まるそうです。(奥内)



どれほどリサイクル産業が盛んかは分からないけれど、分別タイプのごみ箱がどこへ行ってもありました。リサイクル BOX のゴミは、この国では何になるのか？(澤武)



駐車してある自家用車のタイヤ&ホイールに不可解な板が！迷惑駐車への警告かと思いきや...犬が小便をかけるのを防止するための作戦だとか。(永峰)



「五塔寺」の美しい外観を眺め、その文化的背景に思いを馳せながら内部を拝観すると、いくつかの落書きが...！様々な国の文字で落書きがされている中に、日本人によるものと思われる落書きもありました。とても悲しい気持ちになり、五塔寺を後にすることとなりました。(永峰)

内モンゴル 北京の飛行機から万里の長城が見えました。普段はめったに見られることがないので、かなりラッキーな私たちでした。(澤武)

粘土で作ったお面。目のくぼみやあごの形に特徴が！視覚障害のある方が、自分の指や手のひらで触って感じた形や凹凸を、粘土の作品に仕上げているものだとか。(永峰)



学校の校庭にあった卓球台です。盤面が石、ネットが鉄でできています。日本の卓球台とは使用感がかなり異なり風にも弱いですが、そんな状況でも当たり前のように遊んでいることに驚きました。(投石)



中国で見たこと、感じたこと

夕刻の屋台街です。活気があって呼び込みも積極的。ラーメンをいただきました。(投石)



天道酬勤 宁静致远



学校の生徒。とても人懐っこく好奇心も強く子どもらしい印象。話を聞くのに夢中でした。(投石)



北京市内の公衆トイレです。外部に開かれたきれいなトイレです。目が合うか、後ろ姿を披露するか。我慢できなければ、究極の選択です。(吉井)

街路樹の隙間から差し込む、真夏としては珍しく穏やかな陽光。周りの木の葉の位置で分かるとおり、朝日でも夕日でもありません。大気汚染が深刻な北京市内から(吉井)



内モンゴル自治区の杭錦旗の村集会所に集まった農牧民の皆さんです。村全体が大きな家族となり、大切に育てられる子供。「子は国の宝」を感じさせる一枚です。(吉井)



内モンゴルの庫布齊砂漠。一面の砂。どこを見ても砂砂砂...。思わず美しいと感じてしまった。昔は草原だったのだから驚いた。こんなサラサラの砂に植林するのは、難しそうだ。(吉田)

内モンゴルの村にて発見。日光の光を集めて、お茶を沸かす器具。電気を使わないなんて、なんてエコなのだろうと感心しました。これぞ、チャイナクール!!(吉田)



【第2部】 研修報告

参加者名簿

	氏名	勤務先（学校名）	担当教科
1	上田 友美子	神戸市立神陵台小学校	
2	投石 悠一	伊丹市立鴻池小学校	
3	吉田 愛香	神戸市立霞ヶ丘小学校	
4	奥内 正浩	明石市立野々池中学校	英語科
5	阿部 恵子	兵庫県立夢野台高等学校	家庭科
6	澤武 潤子	甲南高等学校	英語科
7	吉井 吏	兵庫県立宝塚西高等学校	英語科
8	永峰 恵介	兵庫県教育委員会事務局人権教育科	人権教育

同行者名簿

	氏名	所属先・役職名
1	藤善 奈美	JICA 兵庫 国際協力推進員
2	山田 麻紀	JICA 兵庫 プログラム・コーディネーター

2-1 事前研修

第 1 回事前研修 6 月 20 日 (日) 10 : 00 から 17 : 30 まで 場所 : JICA 兵庫

参加者自己紹介

JICA 事業概要説明

教師海外研修事業説明

研修国事情

講師 : 羽田一三男 (青年海外協力協会近畿支部)

過去の参加者による授業実践報告

講師 : 玉田 亮太 (姫路市立花田小学校)

開発教育ワークショップ

意見交換

参加者同士の初めての顔合わせであった。アイスブレイキングとして他己紹介をし、参加者をニックネームで呼び合うなど、徐々に打ち解けていった。JICA 事業及び教師海外研修について説明し、参加者それぞれが「テーマ」を持ち、この研修に挑むように伝えた。また、2009 年度教師海外研修参加者から、これから始まる研修に向けてのアドバイスを受けた。

第 2 回事前研修 7 月 11 日 (日) 10 : 00 から 17 : 30 まで 場所 : JICA 兵庫

渡航上の諸注意、海外保険等について (菱和ダイヤモンドサービス)

海外研修日程説明

研修国事情 (内モンゴル自治区)

講師 : 陳 長江 (兵庫教育大学大学院 学生)

開発教育ワークショップ

講師 : 山中 信幸 (柳学園中学・高等学校)

現地交流プログラム検討

内モンゴルの情報がなかなか手に入らない中、兵庫教育大学大学院に留学している陳氏 (内モンゴル出身) を講師に迎え、内モンゴルの基礎情報、人々の様子、マナーについてなど学んだ。また、2008 年度教師海外研修参加者の山中氏による「貿易ゲーム」を行った。当日は、神戸国際大学フェアトレードサークルの学生も参加した。貿易ゲームを通して、参加者たちは世の中の不公平さを感じたようであった。

第 3 回事前研修 7 月 29 日 (木) 13 : 30 から 16 : 30 まで 場所 : JICA 兵庫

日程説明

授業実践案の共有

教材研究など

事前研修最終日は、授業案の共有に多くの時間を費やした。開発教育初心者である参加者たちが、互いの授業案を共有し相談することにより、参加者 1 人では思い浮かばなかったアイデアが出てき、有意義な時間であったようだった。また、オールドス市杭錦旗中学では日本語を学ぶ中学生たちと交流の機会があるため、交流内容の最後の打合せも行った。

2-2 海外研修 訪問先所感

海外研修 7月30日(金)から8月7日(土)まで

7月30日(金)

JICA 中華人民共和国事務所



【目的】研修日程の説明及び中国における JICA 事業を知る。

「日本で中国を肯定的に評価する情報は目立たず、かえって否定的な情報が一般化する。だから、ありのままの中国を見て欲しい。」という所長の一言に勇気づけられ、今後の道筋をつけることができた。(吉井)

CLAIR 北京事務所



【目的】兵庫県と中国のつながりを知る。

CLAIR 北京事務所の方が「中国と日本の子どもたちを交流させたい。」と思っていることを知り、驚いた。しかし日本の学校は、欧米との交流は受け入れるが、中国との交流は受け入れにくいという傾向があり、実施するのは難しいようである。以前の私のように、中国に対する偏見を持っている人がたくさんいるからではないかと思う。(吉田)

JICA 事務所主催夕食会



北京ダックなどの中華料理を前に、JICA 事務所のスタッフの方々との交流を深めた。中国での生活や学校・映画など、様々な話を伺うことができた。中国人スタッフの知識の深さには、驚かされた。私には、日本についてこれほど深い知識はないと反省した。(上田)

7月31日(土)

紅丹丹教育文化交流中心



【目的】草の根協力支援(視覚障害者のための現地でのボランティア活動)について知る。

視覚障害者に対する惜しみない人的援助が積極的に行われ、その仕事を楽しみながら誇りを持って取り組む人々の姿が印象的で、中国人の世話好きさを思った。周りの街並みもいかにも北京的で素敵な立地だと思った。(吉井)

北京市内視察



【目的】市内視察により、日本と中国との共通点や違い、文化を知る。

中国といえばこれ!というくらい有名な「天安門広場」。予想以上に大きくて、広い。観光名所になっていることもあり、多くの観光客でにぎわっていた。広場には多くの分別回収のためのゴミ箱が設置されており、環境への配慮が感じられた。空き缶やペットボトルなどの資源ごみを回収する人たちの姿も見られた。JICA 中国事務所ナショナルスタッフによると、おそらく経済的に苦しい人たちが、生活の糧にしているのではないか、と話していた。(吉田)

8月1日(日)

フフホト市内視察



【目的】首都との違い、その地域の文化・産業・歴史について知る。

内蒙古博物館の恐竜・マンモスの化石や宇宙船の展示に感動した。また、馬頭琴を見てとてもうれしかった。ただ、五塔寺に日本人の仕業と思われる落書きを発見したときには、穴があったら入りたいような気持ちになった。また、フフホトの町並みには、障害者の姿が幾度となく見られ、それでも、互いに助け合う姿に心を打たれた。(永峰)

8月2日(月)

内モンゴル師範大学



【目的】青年海外協力隊の活動現場を視察し、中国の教育・就職事情を知る。

日本から遠く離れた地で、真摯な気持ちで学生に接している隊員の姿に、心を打たれた。学生たちにもっと日本語を...と願う隊員の努力は、私自身見習わなければならないと思った。朝早くから夜遅くまで学習している学生の様子を聞くと、日本には必死で学ぶ学生がどれだけいるだろうかと残念に思う。(上田)

オルドス市杭錦旗中学



【目的】青年海外協力隊の活動現場を視察し、中学生との交流を通して互いに理解を深める。

男子生徒が多く、反応や行動は日本の男子生徒と大きく変わらない。朝6:30から夜11:00まで勉強しており、とても熱心だ。中国では多くの子供たちが寮生活を送っており、それが普通であるという。中国人にとっても内モンゴルの男の子は特に元気なようだ。(澤武)

8月3日(火)

節水灌漑モデル事業プロジェクト



【目的】技術協力プロジェクトの現状及びそれに携わる人々を知り、理解を深める。

現地の人は自分の生活スタイルまで変えながらこのプロジェクトに取り組んでいることに敬意を感じた。また、その生活の中にはいっていつて支援する仕事も大変難しいものようだ。(投石)

8月4日(水)

植林植草事業



【目的】円借款の現状およびそれに携わる人々を知り、理解を深める。

牧民や農民であった人が、JICAの円借款事業を進めているうちに、環境について考えるようになり、自らを林民と名乗り、誰かにこの事業を受け継いでほしいわけでもなく、自分の命が続く限り植林をしていくという話を聞き、彼の精神の崇高さを感じるとともに、事業自体が人の心も育てたのだなあと感じた。(永峰)

8月5日(木)

リハビリテーション
人材養成プロジェクト



【目的】技術協力プロジェクトの現状およびそれに携わる人々を知り、理解を深める。

1998年に開設されたセンターが今でも大切にされ、日中間で積極的な人材交流が行われている様子を拝見し、ODAは箱物だけではなく、実情に合わせて事業を展開しているということを確認できた。急速に進行する中国社会の高齢化に対応するには、福祉行政そのものへのアドバイスも必要ではないかと感じた。(阿部)

北京市内視察
(教材・資料購入)



【目的】海外研修での「気づき」を教材化するための教材・資料購入する。

英語の参考書や教科書を購入した。数多くの参考書が売られており、明らかに英語のレベルは日本のよりも高い。中国の教育への熱心さがよくわかった。(澤武)

8月6日(金)

バンドー化学株式会社



【目的】日本企業の取組みや日本とのつながりについて知る。

国際貢献のかたちは、無償資金協力や有償資金協力、ボランティアといったものばかりではない。健全な経営姿勢と確かな技術を持つ企業の現地における取組みもまた、その国に対して大きな貢献をしていると言える。(阿部)

開発区視察



【目的】中国の経済成長の現状を知る。

将来の開発区のジオラマを見た。壮大なスケールで本当に完成するのかという疑問と、今の中国の経済状況では本当に完成するのではという期待があった。すでに多くの外国籍の企業などもあり、ものすごい勢いで開発されている。(奥内)

天津市内視察



【目的】市内視察により、中国の人々の生活を知る。

天津は京都のような景観維持政策をとっているが、洋風建築の景観を維持しようとしている。かつて他国の権力が入り込んだ土地で、他国風の景観を維持することに対して抵抗はないのだろうか。(投石)

8月7日(土)

研修振り返り




【目的】海外研修での気づきや感じたことを振り返る。

隣国でありながら、あまり中国のことを理解できていなかったように感じた。日本のものであると思っていたものが、実は中国が起源であることを知り、多くの発見があった。メディアはニュースとして関心を引きそうなものを中心に記事にするので、中立ではないと感じた。(奥内)

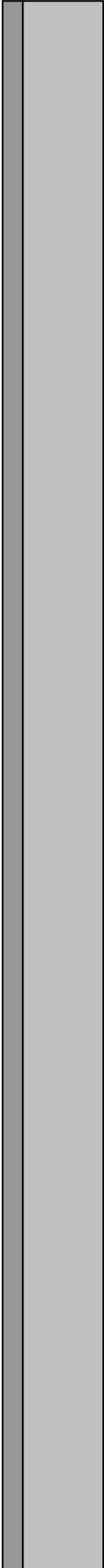
2-3 事後研修

事後研修 8月9日(月)・10日(火)

「第7回 多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー」

8月9日(月)	8月10日(火)
<p>13:00-14:30 >> 基調講演</p> <p>「世界の『今』と向き合い、考える学びの場を」 木下理仁 かながわ開発教育センター(K-DEC)事務局長</p> <p>環境破壊と野生動物の危機について知り、考える。開発途上国の児童労働の現実を知り、考える。さまざまな差別の現実を知り、考える。戦争の怖さを悲劇について知り、考える。考えるだけでなく、課題の解決に向けて行動する。そのきっかけとしての「学びの場」をつくるために、求められるものは、何か。参加者の皆さんと一緒に考えたいと思います。</p> 	<p>13:00-14:30 >> 分科会セッションⅡ</p> <p>a. ビー玉で世界を考える (開発) 中学生以上 インド・コルカタのファミリーテーターから教わった、とっても単純、簡単な体験。そこから、見えてくることは世界につながる。みなさんと一緒に考え、意見を交換しましょう。【藤野 達也】(財)F40協会</p> <p>b. 開発教育の教材づくりの視点～教師海外研修の体験を通して～ (国際協力・平和) 小学生(高学年)以上 自分の体験で、子どもたちに伝えたいと感じたことを、皆さんはどのように教材化していますか？教材にする写真やモノを、どんな視点で選んでいるのでしょうか？私の作った「インドネシアから「豊かさ」を考えるための教材」を基に、教材づくりのヒントを探ります。【山中 信幸】柳学園中学・高等学校</p> <p>c. 映像を使った「心に届く」授業のつくり方(開発教育) 小学生以上 伝わるとは、理解するだけではなく、心で感じることも、そして行動に移すことです。映像は、遠い国の話をまるで自分のことのように感じさせる力があります。5-15-5の法則など、映像を効果的に活用するコツを、実際の体験談から考えます。【西原 昇】青年海外協力隊OB(職種:映像)</p>
<p>14:30-15:00 >> 主催団体紹介&休憩</p>	<p>14:30-15:00 >> 主催団体紹介&休憩 ※各団体が発行する教材を配布します。</p>
<p>15:00-16:30 >> 分科会セッションⅠ</p> <p>五感や全身を使って平和の意味を考え実現するための参加型ワークショップ。平和の意味を想像してから、それを表すモバイルを小グループで創ります。最終的には、各グループの作品を合わせて、みんなの平和への思いを象徴する巨大なモバイルに。 【ロニー・アレキサンダー】神戸大学大学院国際協力研究科</p> <p>県内の子ども多文化共生教育の現状と課題を理解するとともに、どうすれば全ての児童生徒に「豊かに共生する心」を育てることができるのか、共に考えます。 【山田 耕治】子ども多文化共生センター</p> <p>JICA兵庫は、世界各国で活躍した青年海外協力隊OB/OGが講師となり、現地での活動や任国の事情など、学校の要望に応じた講義を出前しています。特に要望の多い「環境」をテーマに、JICA国際協力出前講座を体験してください。 【魚谷 未夏】JICA大阪 国際協力推進員</p> <p>★各分科会のタイトル横に、ワークショップに関するキーワードと対象学年を記載しています。(各講師名は、敬称略)</p>	<p>15:00-16:30 >> 分科会セッションⅢ</p> <p>a. 難民問題の基礎知識(平和) 小学校高学年以上 兵庫県は全国で2番目に多くの難民が住む県です。難民とはどんな人のことか、なぜ難民になってしまうのか、やっとなどり着いた難民キャンプではどのような暮らしになるのか、の3つのワークショップから考えます。 【中尾 秀一】難民事業本部</p> <p>b. 地球の食卓～食の多様性(世界・国内)編～ (多様性) 小学生以上 DEARは、「食」を中心に生活・文化・環境など多彩なテーマで小学生から大人までを対象とする写真教材を出版しました。今回は、世界と国内の多様性から自分の暮らしにつなげるワークを体験します。 【佐藤 友紀】(特活)開発教育協会(DEAR)</p> <p>c. コミュニケーション能力を高め、人間関係を築く (道徳・多文化共生) 小学校4年生以上 在日外国籍生徒・海外子女・帰国子女教育の実践の経験から、すべての学習の基礎となる国語力(日本語力)を高める楽しい学習方法の実践報告と、学級経営や学年経営にも効果を発揮するよりよい人間関係を築く授業を展開します。 【杉浦 浩】神戸大学附属住吉小学校</p>
<p>16:45-17:00 >> クロージング・セッション</p> <p>2日間のセミナーを振り返り、明日からの実践にどう活かすのかを考えます。</p>	<p>16:45-17:00 >> クロージング・セッション 2日間のセミナーを振り返り、明日からの実践にどう活かすのかを考えます。</p>

教師海外研修参加者全員がこのセミナーに参加した。JICA兵庫が毎年実施しているセミナーであり、豊富なプログラムと講師陣から興味・関心のあるものを選んで参加することができる。教室ですぐに使える開発教育教材(参加型ワークショップ)の手法を学ぶことで、海外研修での経験を授業実践により一層活かす機会を提供するのが目的である。



【第 3 部】 授業実践集

『はっけん！たいけん！中国』

学校名・名前	: 神戸市立神陵台小学校	上田 友美子
実践教科	: 生活科・学級活動	
指導時数	: 10 時間	
対象学年	: 小学 1 年生	対象人数 : 37 人 (2 クラス)

< 教師海外研修を通して感じたこと >

観光では行けないような場所を見学したり、現地の人と交流したりすることで、中国のめざましい発展を遂げようとしている一面と、まだまだ発展途上の一面の両方を見ることができた。海外研修前半では、この大国・中国の現状をどう受け止めていいのか戸惑いを感じ、自分自身の知識不足、勉強不足も思い知らされた。

今回の研修では、青年海外協力隊、JICA、日本企業の方々だけでなく、中国の多くの人々からも大きな刺激を受けた。一生懸命に毎日を生きようとしている姿、使命感を持って仕事をしている姿に心を打たれ、この前向きな姿こそ、子どもたちに伝えたいと思うようになった。家族や故郷を思う気持ち、社会をより良くしようという思いは万国共通であり、1年生の児童にも理解できるように思った。

今回の研修は、異文化の中に身を置くことで、自分自身について考えることもできる良い機会となった。

BEFORE

中国帰国児童が 1 割を占めている小学校に勤務しているにも関わらず、私には中国についての知識がほとんどなかった。以下のような漠然としたイメージしか、持っていなかった。

急激に発展してきているパワフルな国。

まだまだ整っていない面が多い、発展途上の国。

教育熱心で、学校教育にも協力的な親が多い。

AFTER

懸命に生きている人々、使命感を持って仕事をしている人々と出会ったことが、最も心に残っている。「私も人のために何かしてみたい。」「世界の人々と交流してみたい。」と、子どもたちが思える授業がしたいと思った。

中国帰国児童はもちろん、その保護者、中国語講師とより交流を深めたいと思うようになった。

日常生活でも、世界の動きについて、日本とのつながりについて、より知りたいと思うようになった。

授業の詳細

1. カリキュラム

(1) 実践の目的/背景

本校の校区には、中国残留孤児・婦人の3・4世の方々が数多く居住している。他にも、残留孤児・婦人の子孫ではないが、中国から転居してきたという家庭もあり、中国帰国児童が1割を占めている。このような中国帰国児童のために、本校では様々が取り組みを行っている。その成果もあって、中国帰国児童は言語や文化の違いに最初は戸惑いながらも、徐々に小学校生活、日本での生活に慣れていっている。特に入学当初から在籍している児童は、他の日本の子どもたちと何ら変わりなく生活しているように見受けられる。しかし、日本の友達とのコミュニケーションの難しさ、中国語しか話せない両親とのコミュニケーションの難しさなど、中国の子どもたちが抱えている問題はまだまだ大きく深刻である。

このような小学校に勤務しているにも関わらず、私には中国についての知識がほとんどなかった。中国帰国児童たちと毎日接し、またその保護者ともしばしば話をしているが、私自身中国に行ったこともなく、知識もほとんどなかった。また、私自身の心のどこかに、中国に対する偏った考えがあるのではないかという思いになることもあった。このような現状の私が子どもたちや保護者と接していて、本当に中国の子どもたちと日本の子どもたちをうまくつなげる教育活動ができているのだろうかと不安に思うことがあった。

日本の子どもたちは中国のことをあまりにも知らなすぎる。中国帰国児童は日本語を学ぶことや文化に合わせることで精一杯になってしまい、中国らしさ、ひいては自分らしさを隠すようになっている。このような現状も、お互いの文化を深く理解することができれば、解消できるのではないだろうかと考え、研修に参加し、授業実践に至った。

まず「はっけん！中国」として、撮影してきた写真やビデオ、持ち帰った資料を用いて、中国の様子を伝える。その際には、「日本と似ているところ・ちがうところ・日本と中国のつながり」という視点を持って、子どもたち自身が中国のよいところに気づくようにしたい。また、今回の研修で出会った人々の前向きな姿も子どもたちに伝えたい。1年生の児童には、国際協力や砂漠化などは難しい内容に思われるが、人々の熱い思いは理解できるように思われる。

次の「たいけん！中国」では、中国のお金・楽器・洋服・地図など、実物を見たり、触れたりすることで、中国についての理解を深める。また、中国語の先生に、簡単なあいさつや数の数え方について教えていただく。このような体験を通して、中国のよさに気づき、お互いの文化を深く理解させたい。

(2) 授業の構成

時限・テーマ ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 中国ってどんな国？	中国について知っていることを発表する。 位置や国旗、人口、言葉などについて知る。	・地図・国旗・写真 (パワーポイント) ・感想記入用紙
2 時限目 はっけん！中国	中国の子どもたちの様子を知り、中国と日本の似ているところ、ちがうところに気づく。	・写真 (パワーポイント) ・中国の教科書 ・感想記入用紙
3 時限目 はっけん！中国	中国の町の様子(日本でもなじみのある店がたくさんあること)を知り、中国と日本の似ているところ、つながりに気づく。	・写真 (パワーポイント) ・持ち帰ったマクドナルドの袋など ・感想記入用紙
4 時限目 はっけん！中国	中国の町の様子(日本でもなじみのあるものがたくさんあること)を知り、中国と日本の似ているところ、つながりに気づく。 日本にも中国製品がたくさんあることに気づく。	・写真 (パワーポイント) ・中国の本、マンガ ・中国製品いろいろ ・感想記入用紙
5 時限目 はっけん！中国	中国の町の様子(日本ではみかけないものがあること)を知り、中国と日本のちがうところに気づく。	・写真 (パワーポイント) ・感想記入用紙
6 時限目 はっけん！中国	中国の町の様子(自然や人に優しいものがあること)を知り、中国と日本の似ているところ、ちがうところに気づく。	・写真 (パワーポイント) ・感想記入用紙
7 時限目 はっけん！中国	中国でがんばっている人々(林民・紅丹丹・ODAの人々)について知り、中国と日本のつながりに気づく。	・写真 (パワーポイント) ・砂漠の砂 ・感想記入用紙
8 時限目 たいけん！中国	中国のお金・楽器・洋服・地図など、実物を見たり、触れたりする。 中国と日本の似ているところ、ちがうところに気づく。	・中国のお金 ・中国の楽器(埙) ・チャイナ服 ・パンダのぬいぐるみ ・地図 ・パンフレット ・感想記入用紙
9 時限目 たいけん！中国	中国語の先生に、簡単なあいさつや数について教えていただく。	・中国語カード ・感想記入用紙
10 時限目 たいけん！中国	中国ごまのビデオ映像を見る。 中国ごまを回してみる。	・ビデオ映像 ・中国ごま ・感想記入用紙

2. 授業の詳細

1時限目 「中国ってどんな国？」

目標

位置や国旗人口、言葉などについて知る。

内容

中国について知っていることを発表する。
位置や国旗、人口、言葉などについて知る。
(パワーポイント)

<ココがポイント>

導入としての1時間なので、今後の学習に意欲が持てるよう配慮する。クイズ形式を取り入れることで、難しい内容も楽しく学習できるようにする。



多くの人がいるから・・・



看板に漢字とモンゴル文字



中国で大人気！！

中国で大人気のキャラクターを紹介する。
感想を書き、発表する。

<ココがポイント>

中国で人気のキャラクターを紹介することで、中国をより身近に感じられる。

児童の感想

- ・シーヤンヤン（羊のキャラクター）がかっこよかった。
- ・バスが2台つながっているのを見て、びっくりした。
- ・ぼくは中国料理しか知らなかったけど、今日たくさんわかった。
- ・中国の旗に星がついていたことは知っていたけれど、5つもついているとは知らなかった。
- ・中国のことがちょっとわかって、うれしかった。
- ・中国の動物のことをもっと知りたいな。
- ・中国がこんなに広いとは知らなかった。日本よりずっと広いんだね。
- ・中国って不思議な国だと思った。
- ・こんど、中国のことを勉強する日はいつですか？私はたのしみです。

所感

中国帰国児童が、生き生きと発言している様子が印象的な1時間であった。「中国ではね・・・」「中国のおばあちゃんの家では・・・」と、友達に伝えたくて仕方がないという様子であった。

人口や国土の面積など、1年生の児童にとっては難しく思われる内容であっても、クイズ形式を取り入れることで、楽しく学習できたようだった。しかし、私の予想に反して、子どもたちはこの授業の後でも具体的な数字までよく覚えていて、驚かされた。それだけ中国に興味を持っているのだとうれしく思った。

また、中国の人気キャラクターを紹介したことで、子どもたちは中国により親しみを覚えることができたようだった。休み時間にも、このキャラクターの絵本を見たり、絵を描いたりして過ごすことがあり、自然な形で中国に触れる機会になった。

2時限目 「はっけん！中国（子どもたち）」

目標

中国の子どもたちの様子を知り、中国と日本の似ているところ、ちがうところに気づく。

内容

中国の子どもたちの様子についての写真を見て、気づいたことを発表する。
中国の教科書を見る。
感想を書き、発表する。

児童の感想

- ・中国にも、学校があるってはじめて知りました。
- ・中国の教科書は漢字がいっぱいでした。むずかしそうで、かわいそう。
- ・私たちと本当にいっしょのおもちゃがあって、びっくりしました。
- ・日本の子どもも、中国の子どももシャボン玉をするんだなと思いました。

所感

本時から中国語でのあいさつを、授業の始めと終わりにするようにした。中国帰国児童の発音の良さに、私も他の子どもたちも驚き、感心した。また一つ、中国帰国児童の子どもたちの良いところが、他の子どもたちにも伝えられる機会となった。

中国の子どもたちの遊び、おもちゃ、学習の様子を知ること、「ぼくたちといっしょなんだな」と感じることができていた。

教科書は、比較しやすいように、小学校1年生用の教科書を用意しておいた。漢字を学習し始めた1年生にとっては、漢字ばかりの教科書は大きな驚きだったようである。

3・4時限目 「はっけん！中国（町の様子）」

目標

中国の町の様子を知り、中国と日本の似ているところ、日本とのつながりに気づく。

内容

中国の町の様子（日本でもなじみのある店）についての写真を見て、気づいたことを発表する。

マクドナルドの袋やおもちゃを見る。

中国の町の様子（日本でもなじみのあるもの）についての写真を見て、気づいたことを発表する。

日本にもたくさんある中国製品を見る。

感想を書き、発表する。



児童の感想

- ・マクドナルドも、牛丼屋さんも、日本と同じでびっくりした。
- ・中国の子どももマクドナルドが大好きで、お母さんに「連れて行って！」ってお願いしているところが、私といっしょです。あんまり連れて行ってくれないともいっしょです。
- ・ケンタッキーのお店の前に、自転車がいっぱい止まっていたから、やっぱり中国って人が多いんだなと思いました。
- ・日本と同じものが、中国でも人気なんだね。不思議です。
- ・ぼくのトレーナーも中国で作られていてびっくりしたよ。

所感

本時はオープンスクールの時期と重なっており、数人の保護者に参観していただいた。「中国のことについて全く知らなかったの、よかったです。」「家で、子どもが『中国のお勉強、おもしろいよ』と話していたので、興味がわきました。今日は、参観できてよかったです。」等々の感想を、保護者からいただいた。本校にとっては、子どもたちだけでなく、保護者や地域の方々に向けて、このような学習を公開していく必要があると思った。

5時限目 「はっけん！中国（町の様子）」

目標

中国の町の様子を知り、中国と日本のちがうところに気づく。

内容

中国の町の様子(日本では見かけないもの)についての写真を見て気づいたことを発表する。
感想を書き、発表する。



6時限目 「はっけん！中国（自然や人に優しいもの）」

目標

中国の町の様子を知り、中国と日本の似ているところ、ちがうところに気づく。

内容

中国の町の様子(自然や人に優しいものがあること)についての写真を見て、気づいたことを発表する。
感想を書き、発表する。



7時限目 「はっけん！中国（がんばっている人々）」

目標

中国でがんばっている人々(林民・紅丹丹・ODAの人々)について知り、中国と日本のつながりに気づく。

内容

中国でがんばっている人々(林民・紅丹丹・ODAの人々)についての話を聞いたり、写真を見たりする。

砂漠の砂を触ってみる。

感想を書き、発表する。

児童の感想

- ・そんなにがんばっている人が中国にはいるんだなと思いました。日本にもいたらいいなあ。わたしも、大人になったらやりたいなと思いました。
- ・おじいさんなのに、がんばっててえらいなあ。
- ・中国には、なんでこんなに優しい人がいるんだろう。
- ・自分のためじゃなく、人のためにやってあげているのが、すごいです。
- ・砂漠にペットボトルが捨てられているのは腹が立ちました。ぼくはごみばこに捨てます。



林民のおじいさん



紅丹丹で



紅丹丹で

所感

本時の内容は1年生にとっては難しいように思われたが、子どもたちは一生懸命話を聞き、写真を見ていた。感想を読むと、私が伝えたかったことが伝わったように思う。本時の後、一人の中国帰国児童が「中国のおじいさん、おばあさんはすごいんですよ。なんでもできるねん。」と話してくれた。中国に住む祖父母のことを、学級の皆に話してくれたのである。家族の強い絆や年配者を尊敬する気持ちは、日本以上で、私たちが見習わないといけないことの一つだと思った。

8時限目 「たいけん！中国」

目標

中国のお金・楽器・洋服・地図など、実物を見たり、触れたりすることで、中国についての理解を深める。

内容

中国のお金・楽器・洋服・地図などの実物を見たり、触れたりする。
感想を書き、発表する。

児童の感想

- ・中国のお金は色々な色で、きれいでした。
- ・中国のお洋服はつつるしてて、きれいだね。

9時限目 「たいけん！中国」

目標

中国語の先生に簡単なあいさつや数について教えてもらい、実際に発音してみる。

内容

中国の絵本を見る。
中国のあいさつについて知る。
1～5までの数字について知る。
ピンインについて知り、ダンスをしながら発音する。
感想を書き、発表する。



上手に言えるかな？



漢字ばかりだ！！

児童の感想

- ・ダンスをしながら言ったので、とってもよくわかったよ。
- ・おうちに帰ったら、おかあさんにも教えてあげます。
- ・さん（中国帰国児童）はとっても上手に言えていて、すごいなあと思ったよ。
- ・漢字ばかりの絵本で、中国の子どもたちはえらいなあ。

10時限目 「たいけん！中国」

目標

中国ごまのビデオ映像を見たり、実際に回したりすることで、中国についての理解を深める。

内容

中国ごまのビデオ映像を見る。

中国ごまを回してみる。

感想を書き、発表する。

児童の感想

- ・とっても難しかった。中国のあのお兄さんはすごい。
- ・児童館にあるので、またやってみようと思います。
- ・ぼくはちょっとだけ出来たので、うれしかったよ



所感

この3時間の「たいけん！中国」は、子どもたちにとって貴重な学習になった。本物に触れるということは、何よりも勝ると思った。この授業の時だけでなく、子どもたちの日常生活の中に、中国の遊びや言葉が自然と広がっていくのが目に見えて、うれしかった。

3. 成果と課題

今回の教師海外研修は、授業実践のためだけではなく、自分自身の視野を広げ、価値観や生き方を見つめ直す良い機会になったと思う。校種、年齢等が異なる参加者たちといろいろな話ができ、とても有意義であった。現地の子どもたちともっと交流する機会があればよかったと少々残念にも思うが、今まで全く知らなかった JICA や企業の取り組みを見せていただけたことも貴重な経験となった。

帰国後は、世界の動きについて、日本とのつながりについて、今までよりももっと知りたいと思うようになった。学校現場でも、中国帰国児童はもちろん、その保護者、中国語講師とより交流を深めたいと思うようになった。

授業実践をふりかえって、中国帰国児童がこんなにも生き生きとした表情で取り組み、積極的に発言している姿が見られてよかったと思う。日本語を学ぶことや文化に合わせることに精一杯になってしまっている子どもたちに、中国について少しでも誇りを持ってほしいと願っていたからである。また日本の子どもたちにとっても、中国の文化だけでなく、日本の文化もより深く知る機会となった。友達をより深く理解する一つの取り組みとなったと思う。

今回の授業実践は、1年生対象ということもあり、研修での体験や資料のすべてを授業に取り入れることができなかった。国際協力や砂漠化など難しい内容までは理解できていないが、一生懸命に生きている人々、使命感を持って仕事をしている人々の熱い思いは感じる事ができたと思う。逆に、1年生の純粋な目、やわらかな頭だからこそ、中国の様々な姿を先入観なく受け入れられてよかったのではないかと思う。

本校の実情をふまえて、今後も引き続きこのような取り組みをしていきたいと思う。また、子どもたちだけでなく、保護者や地域の方々に向けても発信していくべきだと思っている。

『近くの国を調べよう』

学校名・名前	: 伊丹市立鴻池小学校	投石 悠一
実践教科	: 総合的な学習の時間	
指導時数	: 14 時間	
対象学年	: 小学 4 年生	対象人数 : 28 人

< 教師海外研修を通して感じたこと >

青年海外協力隊員と直接話すことができ、その想いにふれることができた。私自身と同年代である隊員たちが選んだ道をこの目でみて、私が教師になったことを振り返る機会になった。隊員たちは今までの日本の生活から遠く離れた地で、それぞれ環境のことや現地の教育のことを考えて過ごしていた。みなさんとても熱い想いをもって取り組んでいたように思う。人それぞれいろんなことを考えて自分の道を選んでいくのだろうが、私は日々子どもたちと一緒に過ごして、子どもたちのことを考え授業をすることを仕事に選んで幸せに思う。

教師海外研修に参加して私は、ココが変わった！

BEFORE

私は海外に行くのが初めてで、中国についてはテレビなどのメディアで報道されていることしか知らなかった。「遠くのこと」という漠然とした認識しかしていなかった。

AFTER

「遠くのこと」であっても、そこで日本人を含むたくさんの方が生きているんだなと思えた。普段教師として子どもたちと学校で過ごしているときにも、この子どもたちの中に将来海外で生活することになる子もいるかもしれないと考えながら接するようになった。

授業の詳細

1. カリキュラム

(1) 実践の目的/背景

授業の目的としては、以下の2点を掲げた。

近くの国について調べ、日本と比べることで、異なった価値観があることを理解する。

近く of 国について調べる課程を通して情報収集能力や、まとめる力を養う。

本校は各学年4クラスずつの中規模校で、全校生徒が約700人である。外国籍や外国にルーツを持つ児童も数人いる。私が現在担任する第4学年の児童たちは、元気で自己主張の豊かな子どもたちである。その反面自分のことに精一杯で自分と違うもの、相容れないものを受け入れることは難しいのが現状である。そのため児童間でトラブルになることもある。ゆえに目的を設定し、授業は他クラスとの交流や学年全体での指導の時間を取り入れ、普通のクラスでの指導とは違うメンバー構成での授業を行った。

については総合的な学習の時間ということで、今まで学習してきた壁新聞など違う形式を学ぶためにポスター形式でまとめている。また、第4学年で習ったローマ字を用いてパソコンを使った情報収集にも取り組んだ。

(2) 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限目 自分の調べたいテーマをもつ	・これから近くの国について調べ学習を行うことを確認する。 ・導入として私の中国行の話をする。	・パワーポイント ・拡大投影機 ・プロジェクタ ・中国のお土産
2時限目 自分の調べたいテーマを決める	・それぞれ、前時の私の話を参考にしながら、自分の韓国や中国について調べたいテーマを決める。 ・パソコンを使っての調べ学習も行うので、パソコン教室及びパソコン、インターネットの使い方なども学習する。	・パソコン教室 ・児童用パソコン ・ワークシート
3～5時限目 テーマについて調べる	・それぞれ、パソコンや参考となる本を用いて調べ学習を行う。	・参考となる本 ・児童用パソコン
6時限目 除さんの話を聞くために、似たテーマごとに質問を考えておく	・多文化共生サポーターとして伊丹市で働いておられる除さんにお話を聞くため、それぞれがなにに注目して聞くのかを考える。 ・除さんは韓国のお話を聞くにあたっての質問を考える。	・ワークシート
7時限目 除さんの話を聞く	・除さんに韓国のことについてお話していただく。	・プロジェクタ ・拡大投影機
8～9時限目 調理実習	・児童全員に、チヂミや餃子の作り方を調べさせ、実際に調理し、他クラスの調理したものを食べ比べる。	・調理に必要な道具

10時限目 永峰教諭の話聞き、私の話と比べて同じ行程で中国にいても人によってみているものが違うことを学習する	・永峰教諭の中国行についての話を聞き、私の中国行の話と比べて聞く。	・プロジェクタ ・パワーポイント ・パソコン
11時限目 自分のテーマの内容と相当する日本の文化についての比較の仕方を学習する	・私が日本のものと近くの国で似ていると思うものの例をみる。それをふまえて自分の調べた内容に、日本で相当するもの、似ているものを比べていこうとする。	・プリント ・提示資料 ・プロジェクタ ・パソコン
12～13時限目 自分のテーマの内容と相当する日本の文化について調べ、ポスター形式にまとめる	・前時に学習したことをもとに、近くの国のものと日本のものを比較しながらまとめる。 ・発表の練習をする。	・ポスターの原稿
14時限目 発表	・自分が調べたことをもとに書き上げたポスターを発表する。	・ポスター

2. 授業の詳細

1時限目 「近くの国を知ろう」

目標

近くの国に興味をもつ。

内容

これから調べ学習を行うことを伝える。

日本の世界の中での位置を確認する。

日本の近隣の国を確認する。

投石の中国行の写真やお土産を見せる。

次の時間はそれぞれ中国や韓国について調べていくポイントを決めていくことを伝える。

<ココがポイント>

写真やお土産を見せながら、調べさせたいポイントをしばっていく。

服装 交通機関 食べもの 気候 遊び

写真「地下鉄」

生徒の反応

興味深そうに聞いている児童が多かった。児童に夏休み前から私が中国に行くことや、2学期の総合的な学習の時間が近くの国の学習になることをあらかじめ予告しておいたためと思われる。ただ、中国から持ち帰ったお菓子については、中国食品に対する安全性への不信感のためか、口にしたいくないという児童もいた。

2 時限目 「調べるテーマを決めよう」

目標

自分の調べたいテーマをもつ。

内容

前時の振り返りを行い、調べる観点がどのようなものがあったのか思い出す。

自分の調べたいテーマをワークシートに記入する。

これから調べ学習で書籍だけでなく、パソコンを使用することをふまえて、パソコン教室・パソコンの使い方についても学習する。

<ココがポイント>

本学年の児童は、調べ学習にパソコンを用いることやパソコンの電源の入れ方やローマ字での文字入力を行うのが初めてである。加えてインターネットを使う際の危険性についてもふれておく。

次回から書籍やパソコンを使って調べ学習を進めていくことを確認する。

生徒の反応

各自の興味にそって意欲的にテーマを設定しようとしていた。選んだテーマとしては、食べものが最も多かった。パソコンへの文字入力はローマ字を学習したばかりということもあり苦戦していた。

所感

児童が意欲的に取り組めたところは良かったが、『調べる』ということに対し児童が不慣れなため、どうやって調べるのか、どんな結論が出てきそうかなどの先の見通しをもって取り組み始めた児童が少なかった。これが今後の課題である。

3～5 時限目 「テーマにそって調べよう」

目標

テーマにそって調べる。

内容

自分のテーマにそって書籍やパソコンで調べる。

<ココがポイント>

調べることができる児童とそうでない児童の差が大きいことが予想されたので、児童のテーマが似通っているもの同士でグループを組み、数人ずつ作業させる。また、検索エンジンの使い方や、効果的な検索ワードの入力の仕方もあらかじめ指導しておく。

所感

調べることの進度については個人差があるものの、パソコンで調べ物をするのが初めてということもあり概ね意欲的に児童は取り組んでいた。ただ途中経過を確認した際に、既存の知識と比較している児童が少なかった。新しいものに接したときに、既存の知識と比べてみて判断することをこの後の単元の中で学んでいって欲しい。

6 限目 「近くの国を知ろう」

目標

近くの国に興味をもつ。

内容

次時に韓国から来られている除さんに来ていただき、韓国の話をしてもらうことを確認する。韓国について知りたいことや、この時点までに韓国について調べたことでわからないことを中心に質問を考える。

次時はいままで自分が調べたことや、私の第1時に話したことと比較しながら話を聞くことを確認する。

<ココがポイント>

除さんの話を聞く際に「比べながら」聞くことを6限目で初めて指導している。除さんの話についてはあらかじめ私の話とポイントを似せて話をさせていただくのでその中から、似ているところを探すのが課題となる。

生徒の反応

児童の選んだテーマは食べものに関するものが多かったのが、除さんへの質問事項では韓国の学校生活に関するもの多かった。

7時限目 「近くの国を知ろう」

目標

近くの国に興味をもつ。

既存の知識と比べながら除さんの話を聞く。

内容

いままで自分が調べたことや、私の第1時に話したことと比較しながら話を聞くことを確認する。

除さんに韓国のお話をさせていただく。

<ココがポイント>

私が第1時に話した内容と似た観点で除さんには話をさせていただく。韓国で売られている漫画や、食べもの、交通機関や、服装についてである。また、除さんは伊丹市内の学校で多文化共生サポーターとして働いているので、日本の学校についてもよく知っている。韓国と日本の学校両方を見られた上でのお話もしていただいた。

前時に考えた質問を除さんに伺う。

生徒の反応

児童が興味を示したのは韓国の学校の話である。特に給食のメニューに興味深かったようで、韓国の児童がキムチを好まないという話に児童は驚いていた。ちなみに市内の給食で出るキムチは人気がある。現代の韓国の子どもが親しんでいる遊びや玩具が日本とさして変わらず、ゲームやハンゲル版の日本の漫画であることが児童のイメージと違っていただい。

所感

給食でその国の伝統的なメニューが不人気になるという話は、教師たちには妙に納得のいく話であった。児童は韓国の子どもたちがゲームやハンゲル版の日本の漫画を読んでいることに驚いたのは、調べてきた近くの国の遊びがもっと伝統的なものが中心であったためだろう。調べたことが全てではないことも残りの単元の中で押さえておきたい。

8～9時限目 「調べるテーマを決めよう」

目標

これまでに調べたことをもとに調理をする。

内容

これまで調べてきたチヂミや水餃子の作り方を実践することを確認する。

1・4組は水餃子、2・3組はチヂミを作り、1・2組、3・4組のペアでお互いの料理を紹介し、食べ合う。

自分たちで調べたことをもとに料理を作れたこと、他クラスにご馳走できたことを確認する。

<ココがポイント>

2クラスをペアにして行ったのは、一つは、できるだけたくさんの国の料理に触れて欲しかったことと、互いに助け合うという体験をさせたからである。よって、それぞれのクラスがお互いにご馳走し合うという条件をつけて行った。

生徒の反応

ものが食べられるということで児童は大喜びであった。

所感

今から思えば、児童が作った食べものが、それぞれの国ではどんな扱いをされているのか、どんな由来がある食べものなのかを全員で考えればよかったと思う。ただ、調理方法から児童が調べてくるということで、児童たちが主体的に取り組むことができたのが良かった。

10時限目 「近くの国について知ろう」

目標

同じ行程で中国へ行ってきた話を聞き比べる。

内容

私と同じ行程で中国へ行った永峰教諭の話を読み、私の第1時の話と聞き比べる。

同じ旅程で同じものを見ても人によって感じることに気づかせる。

所感

私以外の教師がくるのが珍しいため、児童が非常に緊張していたように思う。同じものを見た人から違う意見を聞けるのは多角的な視点をもつという意味で良かった。

11時限目 「近くの国と日本を比べよう」

目標

自分が調べた近くの国の事柄と、それに似通った日本の文化を探す。

内容

前時では、人によって見たものが同じでも、感じるものが違ったということを確認する。

自分が調べた国のことをさらに理解するために、それに相当する日本の文化を探していく。

例として、私が韓国と日本で似ていると思うものを挙げる。

<ココがポイント>

この例では、「チヂミ」と「お好み焼き」を挙げたが、あくまで比較するだけであって優劣をつけるものではないということを確認する。

例をもとに自分のテーマに相当する日本の文化を考えてワークシートにメモしていく。
次回から、2つのものを比べながらポスターにまとめていくことを確認する。

生徒の反応

「チヂミ」と「お好み焼き」の例を出したときは、『それやろうと思った～。』とわかりやすい例に飛びつこうとする児童がいた。一方、「なにをもって似ている」とするのかの判断に迷い、とまどっている児童の姿もみられた。

所感

児童には「日本で似ているものを探しましょう。」と発問したのだが、その一方で比べてみたら違うところもあるというのが迷いのたねになってしまった。似ていても違うものもある、ひいては国や場所が変われば違うこともあるというのを伝えなかったのだが、発問を失敗してしまった。

12～13時限目 「2つのことをくらべよう」

目標

2つの事柄を比べながらまとめる。

内容

前時を振り返りながら、2つのことがらを比べることを確認する。
2つの事柄を比べながらポスターにまとめる。

<ココがポイント>

前時に似ている部分があっても違うところがあるためにとまどっている児童が見られたので、違うところがあってもいいということを伝え、違うと思う部分についてもあわせてまとめるように伝えた。

ポスターのできた児童から発表の準備をする。

生徒の反応

前時と比べて児童の動きがスムーズであった。

所感

自分の調べた近くの国の事柄に相当する日本の事柄を考えさせたが、時間があればそれについても詳しく調べる時間をとれたらより深い国際理解につながったのではないかと。

14時限目 「調べたことを発表しよう」

目標

自分の調べたことや意見を発表する。

内容

自分の調べたことをもとに作ったポスターを発表する。

<ココがポイント>

「似ている」ということも人それぞれ違う部分があり、今回は国による違いをありのまま受け止めて欲しかったため、友だちの発表が似ていようが似ていまいが否定的な態度をとらないようあらかじめ指導した。発表の態度についても確認しておく。

生徒の反応

自分の調べたことを発表できるとあって、児童は意欲的であった。またクイズ形式を取り入れるなど、工夫して取り組んでいた。

生徒の感想

- ・日本では食糧はあまり作っていないけど、中国ではたくさん作っている。
- ・韓国語ではあいさつは一通りなのに、なんで日本では朝・昼・夜全部違うのだろう。

所感

発表にとれる時間が少なく、いろいろな観点で比較できていた児童もいたが、一つの発表について詳しく掘り下げることができなかった。児童それぞれの感じた「似ているところ」「違うところ」が全員で共有できたならもっと良いものになっただろう。

3. 成果と課題

最後のまとめが終わった段階でほとんどの児童は、2つの事柄を比べることができていた。ただ、中には日本と近くの国を比べた上で「日本のものが良い」と結論づける児童もいた。結論をだすことは間違っていないが、今回の単元の目標としては違いを認めることが第一歩なので、本当にこういうまとめ方で良かったのか、自身に問うていきたい。お互いの違いを認めるのが難しいということは、私自身今回の中国行きを通じて感じたことでもある。難しいけれども違いを認め、ありのままを受け止めていく姿勢を児童に伝えていきたい。

参考資料

・参考文献

- 『元気が出る！世界の朝ごはん 東・東南アジア』日本図書センター 2007年
- 『国際理解にやくだつ世界の遊び1 アジアの遊び1』尾崎茂編 ポプラ社 1998年
- 『国際理解にやくだつ世界の遊び2 アジアの遊び2』尾崎茂編 ポプラ社 1998年
- 『モノから知る日本と世界の結びつき 食べるモノから見る、日本と世界』
金谷敏博編 共同印刷 2006年
- 『もっと知ろうよ！中国1』納村公子著 飛来社 2003年
- 『国際理解にやくだつ NHK地球たべもの百科9 韓国キムチ』
小桜浩子編 ポプラ社 2001年
- 『世界の市場 アジア編 韓国』山口郁子編 アリス館 2007年
- 『世界の市場 アジア編 中国・台湾』山口郁子編 アリス館 2007年
- 『もっと知ろうよ！ハングル1 あいさつと文字』飛来社 2000年
- 『体験取材！世界の国ぐにー11 中国』堀創志朗 ポプラ社 2007年
- 『体験取材！世界の国ぐにー12 韓国』堀創志朗 ポプラ社 2007年
- 『国際理解にやくだつ 世界の衣食住1 東アジアの食べもの』
図書印刷株式会社 2001年

・参考ホームページ URL

- 「JICA」<http://www.jica.go.jp/>
- 「キッズ外務省」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/world/index.html>

『世界の中の日本とわたしたち』

学校名・名前	: 神戸市立霞ヶ丘小学校	吉田 愛香
実践教科	: 社会・総合的な学習の時間	
指導時数	: 12 時間	
対象学年	: 小学 6 年生	対象人数 : 179 人

< 教師海外研修を通して感じたこと >

自分が想像していた以上に、日本の人々が自分たちの知識や技術を中国の人たちに伝えていることに驚いた。またメディアを通して知らされていたことは、ある一面から見たものにすぎず、自分の目で見て確かめることの重要性を知ることができた。

内モンゴルでの砂漠の見学は、今、地球で起こっている環境破壊を目の当たりにする体験だった。また、それを何とかしていこうとする人々の話を聞き、一人一人が少しずつでも自分たちのできることをしていくことが大切だと感じた。

教師海外研修に参加して私は、ココが変わった！

BEFORE

中国に対しては、様々な事件やメディアからの情報により、悪いイメージしかもっていなかった。

近年すさまじいスピードで成長しており、国際社会において、重要な国という印象があった。

輸出入や文化の面でのつながりは深い、怖そうだなという思いをもって参加したのが事実である。

AFTER

実際にそこで暮らしている人々の生きた話を聞いたり、現地のスタッフと触れ合ったりする中で、彼らの温かい人間性や、一生懸命さに惹かれている自分がいた。

日本に対して興味をもってきている高校生とのふれあいを通して、日本人も中国人もみんな同じだと思うようになった。

授業の詳細

1. カリキュラム

(1) 実践の目的/背景

世界には 200 近い国々がある。子どもたちにとっては、スポーツや食などを通して身近に感じる国々も多いが、偏ったイメージや偏見があるように感じられる。特に中国に対しては、私自身と同様に、メディアからの情報により、マイナスのイメージが強い。そして他の国に対しても、この国はこうだ、この国は嫌いというように知っている国々をイメージで決めつけている児童が多くいる。

今の社会は世界の国々がつながり、協力し合って成り立っている。世界の人々のくらしの様子や願い、日本とのつながりを知る中で、考え方や文化に違いがあることを気づかせたい。また、児童自身が感じていた国のイメージ以外の側面や、自分たちと似ている面があることにも気づいてほしい。そして結びつきを深める世界の中で、世界の国々とお互いに理解を深め合い、平和な国際社会の実現を目指して、日本が国際社会の中で重要な役割を果たしていることを理解し、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さを自覚できるようになることを目的とする。

(2) 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 世界がもしも 36 人の村だったら	・クラスの人数を世界の人口としたとき、どんな人々がいるのか ・その人々がどんな生活をしているのか	世界地図 世界がもし 100 人の村だったら (本) 国名が入ったカード
2 時限目 日本とつながりの深い国にはどんな国があるだろう	・知っている国をあげ、どんなことを知っているか伝える ・知っている国と日本にどのようなつながりがあるか考える * 中国については、必ず触れておく	世界地図 ワークシート
3 時限目 中国ってどんな国?	・中国のイメージを出し合う ・中国の概略 * 位置、面積、人口、言葉、国旗 ・街中の様子 * 似ているところ、違うところ * 日本とのつながり ・学校の様子・食べ物	パワーポイント ワークシート 中国土産 (漫画・教科書)
4 時限目 中国ってどんな国?	・地球環境問題 * 内モンゴル自治区の砂漠化 ・日本とのつながり * 国際協力で活躍する日本人	パワーポイント ワークシート 教科書・砂漠の砂 モンゴル族の民族帽子

5～6時限目 中国について調べよう	・テーマに沿って調べる ＊学校、くらし、文化、つながりなど	本、新聞 インターネット
7時限目 中国について発信しよう	・班の友だちに調べたことを発表する	
8～10時限目 日本とつながりのある国について調べよう	・韓国・アメリカ・オーストラリアを中心に自分の調べたい国について、日本とのつながりやその国の学校生活や文化について調べる	本、新聞 インターネット
11～12時限目 調べたことを発信しよう	・自分が調べたことをクラスみんなに広める	

2. 授業の詳細

1時限目 世界がもしも36人の村だったら

目標

- ・世界の中にはどんな人々がいて、どんな生活をしているのか感じとる。

内容

クラスの人数を世界の人口としたとき、どの地域にどのくらいの人々が生活し、どんな言語が存在しているのか体験する。食べ物を貧富の差によって分けることで、現在の世界の状況を知る。

- ・カードに印をつけておき、印ごとに別れる。

・お菓子を貧富の差で格差をつけて渡すことで、実感する。その後すぐ感じたことを発表する。「もしも世界が100人の村だったら」の本を読み、世界には様々な人々が生活していることを知る。

<ココがポイント>

- ・ランダムに配ったカード（国名とその国の言葉が書いてある）をもとに、同じ地域ごとに分かれる。誰が仲間か確認するときは、自分のカードに書いてある言語しか話せない。（中国なら「ニーハオ」）
- ・このとき人口密度も分かるよう、ロープで区切った中に座る。（6つの地域）

児童の感想

- ・アジアの人口がとても多かった。
- ・私はお金持ちでたくさんのお菓子がもらえたが、中には1つのお菓子を数人で分けあっていて、貧富の差に驚いた。私は恵まれているんだなあと思った。
- ・数人でたくさんのお菓子をもらっていて、分けてほしかった。

所感

実際にクラスを世界の人口比率で分けることによって目で、体で世界にどんな人々が暮らしているのか感じる事ができた様子だった。アジアの人口の多さについてはすでに知っている児童がたくさんいたが、ヨーロッパやアメリカの人口密度の高さについては全く知らなかったようで、驚いている児童が多数いた。導入として、この教材を取り入れたことは世界に目を向けるきっかけとなりよかったように思う。ただ、貧富の差ばかりを強調することになってしまったので、ここでは、貧富の差についてはふれなくてもよかったように思う。

2時限目 日本とつながりの深い国にはどんな国があるだろう

目標

- ・日本は世界中の国々につながりがあることを知る。

内容

知っている国を書き出し、どんなことを知っているか伝えあう。

知っている国と日本にどのようなつながりがあるか考える。

<ココがポイント>

観光地・スポーツ・歴史・食べ物とジャンルを問わず、知っていることをたくさんワークシートに書き出した。

児童の感想

- ・知らないところでも日本とのつながりがたくさんあることが分かった。
- ・スポーツでつながっている国がたくさんあった。
- ・つながりを考えてみると、世界の国がすごく近く感じられた。
- ・日本に文化が入ってきている国がたくさんあって驚いた。

所感

考えていた以上にたくさんを知っていて驚いた。観光地や食べ物、スポーツだけでなく、経済面でのつながりや歴史に関わることまでたくさんの視点で考えられたことは、今後の調べ学習の助けになるように感じた。

3時限目 中国ってどんな国？

目標

- ・中国について知り、興味をもつ。

内容

中国に対してもっているイメージを出し合う。

中国の概略（位置、面積、人口、言葉、国旗など）を確認する。

街中の様子から似ているところ、違うところを見つける。

- ・沖縄のシーサーのような守り神
- ・故宮の色鮮やかさは二条城に似ている。
- ・こま犬のようなもの ・掛軸

日本とのつながりを知る。

- ・日本の会社がある ・食べ物似ている
- ・日本のアニメやドラマ

小学校の様子や高校の様子を知る。

どんな食べ物があるか知る。



言葉クイズ



オルドス市杭锦旗中学



漢族の食事



言葉クイズ

児童の反応

- ・中国に対して蔑むような見方をしたり、怖い、自分勝手などの考えをもったりしている児童がほとんどだった。しかし、中国と日本は古くから交流があり、漢字など多くの文化が伝わってきたなど肯定的な意見もあった。
- ・パワーポイントを使った中国紹介では、中国の漢字から意味を推測する場面で、読めることに喜びを感じている児童が多数いた。
- ・中国の小学生の勤勉さに驚いていた。

所感

中国に対するイメージを子どもたちに聞いたとき、想像していた以上のマイナスイメージが出てきて戸惑った。子どもたちのイメージを始めに出しておいてから教材に入ると、最初と最後での変化に気づきやすいので必要だと思うが、今回に限っては聞かない方が良かったかもしれない。しかし、1時間終わった後の感想では「中国を身近に感じた。」「料理がおいしそうだった。」「実際に行ってみたくなった。」など肯定的な感想をもつようになっており、多方面から伝えていくことの大切さ、自分自身の経験が子どもたちの印象を大きく変えることができるのだということを痛感した。



日本と似ているものたち



日本の会社がいたるところに

4時限目 中国ってどんな国？

目標

- ・環境問題に興味をもち、中国では砂漠化が問題となっていることを知る。
- ・中国で活躍している日本人がいることを知り、日本人としての誇りをもつ。

内容

地球環境問題としてどんなことがあるかを考える。

内モンゴル自治区では砂漠化が進んでいることを知る。



庫布齊砂漠



水をまく機械

・日本人が砂漠化を防ぐために内モンゴル自治区で活躍していること知り、それ以外にも日本語教師や視覚障害者音声情報提供技術指導事業や中国リハビリテーション研究センターでも、技術協力等で従事していることを知る。

<ココがポイント>
本物の砂漠の砂を見せる。袋越しに触ることで、砂がさらさらで、植物が育ちにくそうだと感じる事ができたようである。
また、砂が飛んで砂漠が広がることの理解も深まった。



植林植草事業



視覚障害者施設

児童の感想

- ・日本の技術が中国で役立っていて、日本人はすごいと思い嬉しくなった。
- ・日本以外の場所で環境を守る活動をしている日本人がいることを初めて知った。自分にできることからコツコツしていきたいと思う。
- ・点字を中国に教えたなんてすごい。日本人であることに誇りをもてた。自分も世界で活躍できるようになりたい。



中国リハビリテーション
研究センター

所感

砂漠の砂を実際に見て、この状態から植林することの難しさを理解する助けになったように思う。遠いことのように感じていた砂漠化だが、黄砂によって日本にも影響が出ていることや、日本人が活動していることもあり、より身近に感じている様子だった。日本点字図書館の職員が中国の視覚障害者のための副音声映画の作り方を指導したり、リハビリテーションセンターの人材育成のために日本人が派遣されていたりと、技術協力にも力を入れている理由についても考えることができたのは意味のあることだった。

5～6時限目 中国について調べよう

目標

- ・決めたテーマについて調べ、中国についてまとめる。

内容

興味をもったテーマにそって調べる。

- ・学校生活・食事・民族・文字と言葉・砂漠化・歴史など

児童の様子

インターネットや本を使って積極的に調べ学習を行っていた。また、家で保護者に聞いてくる児童もいた。

所感

今回は、私が紹介した中国の情報をもとに、さらに気になったことについて調べてまとめるという方法を取った。だいたいのことは、今までに紹介されたことをまとめる予定だったので時間は十分足りる予定であった。しかし、実際に活動を始めてみると、調べたい事柄がいくつも出てきて、2時間で調べてまとめることは難しかった。結果的に3時間使い調べ学習を行った。調べたことは新聞形式にまとめるようにした。

7時限目 中国について発信しよう

目標

- ・調べたことを分かりやすく発表する。 ・友だちが調べたことを聞き、メモを取る。

内容

班の友だちに調べたことを発表する。(4人1組の班で、順番に調べたことを発表し合う。)

内モンゴル自治区のオルドス市杭錦旗中学で、私が高校生と交流している様子のビデオを見る。

- ・夏休みに児童が作成した「日本の遊びレクチャービデオ」を見て、実際に高校生が日本の遊びに挑戦している様子を撮影したのを見る。

児童の感想

- ・中国は民族が 50 以上もあって違う風習や言葉を使っていることに驚いた。同じ国なのに、言葉が通じないなんて大変そう。
- ・中華料理が好きだから、今回調べた料理を食べに中国に行ってみたくなった。
- ・僕たちが紹介した遊びのビデオを見て、お手玉や竹トンボをしてくれて嬉しかった。友だちになれたような気がした。

所感

調べた内容の全てを発表するのではなく、要点を絞り、特に伝えたいことだけを発表するようにした。食べ物、文化、小学生の学校生活が特に多いテーマだった。最後に、児童が作成したビデオをオールドス市杭錦旗中学の高校生に見せたときの様子を撮影したビデオを児童に見せた。日本語での解説を楽しそうに見る高校生の様子を見て、言葉が通じなくてもジェスチャーで思いが伝わる喜びを感じている様子だった。また、楽しそうな高校生の様子を見ることで、今まで感じていた壁もさらに取り払われたように思う。

8～10 時限目 日本とつながりのある国について調べよう

目標

- ・興味のある国について日本とのつながりやくらしの様子について調べ、まとめる。

内容

韓国・アメリカ・オーストラリアを中心に自分の調べたい国について、日本とのつながりやその国の学校生活や文化について調べる。(その他にも、ブラジル・オランダ・イタリア・イギリス・フランス・ドイツなどがあつた。)

児童の様子

前時同様に、それぞれが自分の調べたい国について、インターネットや本、新聞等で調べ学習を行った。また、家で保護者聞く、本を用意するなど積極的に取り組んでいる児童もいた。

所感

中国に関する授業をすでに行っていたため、それぞれが集中して調べ学習に取り組むことができた。同じ小学校でも国によって学校制度が違っており、くらしのようすが異なるため、自分の興味のある国のことを楽しんで調べることができたようであった。調べる国を教科書に出ている 3 カ国に限って学習を行うか迷ったが、自分の調べたい国を自由に選べるようにしてよかった。

11～12 時限目 調べたことを発信しよう

目標

- ・調べたことを分かりやすく発表する。
- ・友だちが調べたことを聞き、メモを取る。

内容

調べたことの発表会を行う

- ・学級全体の前で発表する。

児童の様子

- ・いろいろな国のくらしの様子を知り、みんな少しずつ違うけれど、それぞれに良いところがあり、お互いに良いところを認め合っていけば平和な世界が築けるのではないかと思った。
- ・僕たちが世界の子どもたちのことを知って、世界の子どもたちもお互いのことをわかろうとすれば戦争はなくなるとおもう。
- ・世界のいろいろな国のことが分かった。調べた国にいつか行ってみたい。

所感

前は班ごとだったが、今回はそれぞれ調べた国が違うので、国ごとに学級全体の前で発表した。同じ国を調べた児童がいた場合は、発表内容が重ならないように発表させた。一人一人が自分の調べた国に愛着をもち、「行ってみたい」と思ったようである。またその国ごとの文化の違いや、また国の中でも文化の違いがあることに気づけた。国の文化に違和感をあつた児童もいたようだが、多数の児童はその違いを受け入れ、また興味をもっていたようである。

3. 成果と課題

授業を通して中国という国を多方面から見つめることができた。私自身が実際に見て、聞いて、ふれてきた中国を伝えるということで、子どもたち一人一人が興味をもって授業に参加することができた。最初は馬鹿にしたような発言しかしていなかった児童だが、話を聞き、自分たちで調べ、そして私が持って帰ってきた教科書や本を見たり、中国独楽で遊んだりしていくうちに、「行ってみたい」「おもしろい」「日本人とあんまり変わらない。同じ人間だ。」と感じるようになったようである。最初は、一方的に伝えるばかりで興味や集中力はもつのだろうか心配な点もあったが、教師の実体験というのはそれだけで子どもたちにとっては、聞きたい話なのだということを改めて実感した。そうした意味でも今回の研修に参加できたことは価値のあるものであった。

他クラスに対しては中国の紹介の部分のみ授業を行った。ただ、5クラスもあるので、本校でこのような形で授業を組み立てていくことは少し無理があるように感じた。今後は合同で行うかやり方を変えて授業を組み立てていく必要がある。また、世界中の国々について学ぶ機会をより有意義なものにするため、実際に諸外国の人々にゲストティーチャーとして来てもらい交流する機会がもてれば、さらに世界の国々を身近に感じるのではないかと思う。しかし、実際には総合的な学習の時間は限られており、時数の確保という点では難しいことが現状である。

参考資料

・参考文献

『世界がもし100人の村だったら』マガジンハウス 池田香代子/再訳・文

文部科学省検定済教科書 小学校社会科用 『小学社会6年下』大阪書籍



『メディアから環境を考える』

学校名・名前・担当教科：明石市立野々池中学校 奥内 正浩（英語科）
実践教科：総合的な学習の時間
指導時数：8時間
対象学年：中学3年生 対象人数：39人

< 教師海外研修を通して感じたこと >

今回の研修に参加するまで、隣国でありながら中国へは一度も訪問したことがなかった。マスメディアから報道される内容などから、偏った見方をしていたように感じた。日本には中国の製品があふれ、逆に日本の製品も中国へ輸出されている。また、多くの日系企業が中国へ進出している。今後ますます、経済的に協力し合って互いの国が発展できたらと思う。また、過去の不幸な歴史を繰り返さないためにも、より友好的な関係を構築できたらと感じた。

教師海外研修に参加して私は、ココが変わった！

BEFORE

自転車、北京オリンピック、上海万博、食の安全、環境、人権など、さまざまな話題が、テレビ、新聞、インターネットなどを通じて流れている。

様々な情報が流れる中で、マイナス的なイメージの方が強く残っている。今回が中国への初訪問というのも、そのような理由からかも知れない。

中国にルーツを持つ生徒が在籍する年度もあるが、文化や思想の違いなどあまり気にせず接していたように思う。

AFTER

メディアリテラシーについて考えるようになった。情報を発信する側の意図や、その情報の出所なども確認し、あいまいな情報から誤った認識をしないようにと心がけるようになった。また、街を走る大量の自転車は北京では過去のものとなっており、過去のことが現在でも続いているという思い込みも多く見られた。経済面、技術面では多くの発展を見せた中国であるが、社会福祉、環境問題では、支援を必要としていることがわかり、中国への ODA の必要性を感じた。

授業の詳細

1. カリキュラム

(1) 実践の目的/背景

平成 20 年度より、総合的な学習の時間（野々池タイム）のテーマを、「環境」に設定して学校で学習に取り組んでいる。平成 20 年度に G 8 首脳会議が北海道で、環境大臣会合が兵庫県で開催されたことがきっかけである。当時は化石燃料価格が高騰し、資源の大切さ、自然環境を保護について考えた。それから 2 年が経過し、化石燃料も当時ほど高騰しておらず、また、環境保護の意識も薄れつつある。

今回、教師海外研修で視察した、中華人民共和国の内モンゴル自地区の砂漠化と、植林活動を題材に取り上げ、本校の環境学習の一部に取り入れた。今回、初めて中国を訪問し、自分の持っている中国のイメージと、実際とは大きくかけ離れたものであった。それは急速に中国が発展しているのに、自分の見方が変わっていなかったことと、日本のメディアの中国の捉え方にも原因があるのではと考えるようになった。

近年、ICT の発達に伴い、テレビ、インターネット、雑誌、新聞など非常に多くの情報があふれている。对中国に対してもいろいろなニュースが氾濫しているが、どちらかといえば、マイナスイメージを与えるものが多いように思われる。それは、人々の関心が、とりわけそのような題材に対して関心が強いため、そのような出来事ばかりが起きているわけでもないと思う。

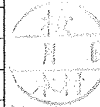

今回の学習を通じて、教師や講師提示した資料だけでなく、新聞、インターネット、書籍なども活用し、情報化社会で生きる人間として、うわさや偏見で物事を見ず、様々な情報に対して批判的に見つけ、科学的に正しい知識を得る手段を身につけさせたいと考える。

また、プレゼンテーション力を身につけさせ、他人に自分の思いを正しく正確に伝えさせる技術と態度を養いたい。特に今回の学習では、他のクラスは、このテーマでは学習しておらず、他のクラスの生徒に、自分たちが学んだことを ICT 機器などを活用しながら、わかりやすくプレゼンテーションし、学びを共有させたい。

そして、自然と共生するためにできることを机上の学びで終わらせず、日々の生活の中で実行させていきたい。

～ 評価について ～

本学習は、総合的な学習の時間で実施した。自己評価カードを作成し、授業ごとに自己評価させた。3行コメントの欄を作り、生徒の気づきなどを書かせ、生徒に意識化させるとともに、教師側の授業のフィードバックとして活用した。新聞スクラップ発表会、プレゼンテーションでは相互評価も行い、生徒たちにただ聞かせるのではなく、ポイントを提示し評価させた。

10/12			
中国の環境問題	内容が理解できた	1 2 3 ④	
中国の自然保護の取組み	内容が理解できた	1 2 3 ④	
インターネット検索	正しく検索できた	1 2 3 ④	
新聞記事を読む	記事をまとめられた	1 2 3 ④	
学習への意欲	前向きに取り組めた	1 2 3 ④	
コメント			
初めて、中国にはこんな環境問題があるんだということを知りました。 インターネットは便利だけど、ネットトラブルが起こるし怖いと思います。			
自然エネルギーの利用	内容が理解できた	1 2 3 ④	
新聞スクラップ (宿題)	きちんとできた	1 2 3 ④	
プレゼンテーション作成	役割分担がきちんとできた	1 2 3 ④	
学習への意欲	前向きに取り組めた	1 2 3 ④	

生徒の自己評価カード

(2) 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
学年集会 環境問題について考える (学年集会形式で実施)	テーマ決定(6つの中からクラスで1つ決定) ・Eco アイデアの製品作り パナソニック(株) ・ウミガメ保護活動 明石市土木部海岸課 ・環境を意識した道路づくり 国土交通省兵庫道路事務所 ・河川の生物 明石工業高等専門学校 ・メディアから環境を考える 共同通信社 神戸支局 ・ダンロップ環境教室 NPO 環境21住友ゴム工業 (タイトルはいずれも仮題) (集会で内容を説明し、クラスでテーマを設定)	DVD パワーポイント
1時限目 環境問題について考える (中国から) (クラス単位で実施)	・中国についての学習(地理・人口・産業など) ・環境問題 ・自然保護に取り組む人 ・インターネット検索 ・新聞等から環境について考える (スクラップの練習) ・スクラップの役割分担	・自作プレゼン ・内モンゴル砂漠化 ・植林活動 ・ノートPC6台 ・朝日新聞特集号 ・新聞・インターネット 書籍などの活用
2時限目 地球に優しい取組みを考える (自然との共生) (クラス単位で実施)	・ソーラークッカーを利用して料理を作り、自然エネルギーの活用について考える ・新聞記事発表(Eco な視点の記事) ・プレゼンテーションの役割分担 概要説明・事前学習1・事前学習2・新聞記者の出前講座・新聞記事から・まとめの6つ	・ソーラークッカー (ポップコーンづくり) 宿題 (新聞スクラップ) プレゼン企画用紙 実物投影機
3時限目 記者の視点から (共同通信社) (クラス単位で実施)	・取材の中から環境について考えた事例 ・プレゼンテーション作成に当たって指導 (興味を引く見出しなど)	・共同通信社
4時限目 記事をまとめる (他者に伝える) (クラス単位で実施)	・宿題の新聞スクラップの発表 ・スクラップした記事、学習で配布された資料、メモを活用してプレゼンテーションを作成する	・実物投影機 ・スキャナー
5時限目 思いを伝える1 (クラス内発表)	・宿題の新聞スクラップの発表 ・作成したプレゼンテーションを相手にわかりやすく伝える工夫を行う。	・実物投影機 ・プロジェクタ ・ノートPC
6時限目 思いを伝える2 (学年発表)	・他のテーマを学習した他クラスの人たちに分かりやすく工夫して伝える。また、しっかり話を聞く。	・プロジェクタ ・ノートPC



粉の様な砂に驚く生徒たち



廊下に掲示した新聞スクラップ

2. 授業の詳細

1時限目 「環境問題について考える」

目標

メディアリテラシーを身につける

「隣国」中国の間違ったイメージを取り除き、正しく理解する
中国の環境問題について学び、日本も影響していることを知る。

内容

中国のイメージ（生徒に聞く。）

今回の視察の様子（クイズなども活用する。）

最近の話題（尖閣モグラの危機）の紹介

内モンゴルの環境問題を紹介

環境保全の取組を紹介

インターネットを活用した情報収集の練習

練習として、「風が吹けば桶屋がもうかる」を検索させ、
正解以外にも様々な情報がインターネットにあることを
確認させる。

（情報の出所、真偽について考えさせる。）

新聞を利用した情報収集

（新聞から、自分のほしい記事を探し、まとめさせる。）

メディアの特徴を確認



訪問した砂漠
内モンゴルの砂漠



インターネット検索の様子

<ココがポイント>

視聴者・読者が興味を示すのは、マイナスイメージを与える内容が多い。そのような情報ばかりがすべてではないことを確認する。メディアのそれぞれの特徴を理解し、学習を行ってほしい。

課題の紹介（新聞等のスクラップ）

教師のスクラップの見本を提示

1992年環境サミットのスズキさんの発表の一部を紹介

生徒の感想

- ・実際に砂を触ると、思ったより粒が小さく、粉のようだった。これなら、黄砂として日本に飛んでくると思った。
- ・中国で使われている漢字が読め、だいたい意味もわかった。よく考えてみると漢字は中国から日本にきたのだからあたりまえのことだが・・・
- ・インターネットで中国の環境問題について調べて見た。あまり時間がなくうまく調べられなかったが見つめることができた。
- ・インターネットの情報は正しいものばかりではないと思った。

所感

最初の導入、中国のイメージを聞くとほとんどマイナス面を発表する生徒が多かった。授業前に予想はしていたが、これほど多いとは驚いた。教材研究をして望んだつもりだが、その場で答えに困る時もあった。興味ある話ができず、生徒が集中できない場面もあった。メディアリテラシーを高めたいと思い、様々な手段で調べ学習を行い、比較させたかったが、ちょっと内容が多すぎた。

2時限目 「地球に優しい取組みを考える」

目標

自然エネルギーの大きさ、無限性を体感する
地球に優しい取組みを新聞記事から探して発表し、知識を共有する
プレゼンテーションの役割分担を協力して行う

内容

ソーラークッカーを利用してポップコーンを作成

<ココがポイント>

簡単な仕組みの器具で、調理ができることを学び、
その用途について考えさせる

宿題の新聞記事発表(各班1名)

<ココがポイント>

最近の記事には省エネルギーに関する話題
が多い。記事を集めることでその多さを実感す
る。新聞スクラップは、実物投影機を使いモニ
ターに映した。



ソーラークッカーで調理

プレゼンテーションの役割分担(1人1分)

プレゼンシート	内容
学習の概要説明	テーマと学習の説明
事前学習 1	中国の環境問題など
事前学習 2	ソーラークッカーの利用
講師の授業から	講師の話をもとめる
新聞記事から	スクラップした記事から
新聞記事から	〃 (7人班のみ)
まとめ	学習をもとに地球に優しい環境宣言



新聞記事発表の様子

プレゼンシートは、プレゼンテーションソフト(パワーポイント)を使うのではなく、手書きのシートをスキャナーで読み取り作成させることにした。作成時間の短縮と、課題として家庭で取り組めるからである。

生徒の感想

- ・ソーラークッカーをする予定が、曇りのためできず、日を変更して行うことができた。電気やガスのない地域では有効な道具だと思ったが、天候に左右される点が不便だと感じた。また、私たちの周りには、使われていないエネルギーがたくさんあるんだなぁと感じた。
- ・ソーラークッカーで作ったポップコーンは、普通に調理したものと変わりがなかった。おいしかった。

所感

曇りのため延期したことにより、ソーラークッカーの欠点がよくわかったようだ。自然エネルギーだけであれだけの強力なエネルギーが出ることに驚いていた生徒が多かった。

新聞記事発表会では、最近新聞を購読していない家庭も多いと聞いていたので、集まるかどうか心配したが、まじめにやって来た生徒が多く安心した。新聞をあまり読んでいない生徒が多いことも驚きであったが、今回の取組みで少しでも新聞を読む生徒が増えればと感じる。

3・4時限目 「記者の視点から環境を考える」「プレゼンテーション作成」(3時限目は5時間で実施)

目標

共同通信社 神戸支局 松井記者の話から開発と自然保護について考える。
わかりやすいプレゼンテーションをするための工夫を学ぶ

内容

共同通信社 神戸支局の松井さんの講演

- ・共同通信社とは
 - ・香川県高松支社勤務時代から
早明浦ダムの貯水率が新聞の天気欄に掲載されている。
(香川県には大きな河川がなく、高知県にある早明浦ダムに依存している。断水が過去に何度も行われた。)
 - ・人口降雨実験に反対運動
(高知県はこのダムに5%しか水を依存していないので塩害などの可能性のある人工降雨実験に反対する)
 - ・バイオディーゼル(北条鉄道)の記事から
プレゼンテーションの作成
- わかりやすいプレゼンテーションするには

<ココがポイント> - 記者の視点 -

シート

見出しの工夫(記事、見出しの順に)

原稿

5W1Hが入っているか確認

情報の出所を明らかに



(社)共同通信社松井記者の講演



新聞を活用した授業の様子

<ココがポイント> - 教師からの視点 -

教室の後ろに座っている生徒からも見える文字の大きさ、配色などを考えてプレゼンシートを作成するように指導した。プレゼンシートはあくまでも補助的なもので多くの情報を載せすぎない。話の内容のほうが大事であることを伝えた。

新聞記事スクラップ発表会

<ココがポイント>

本校はNIEの研究指定校であり、6社の新聞を購読している。誰でも見られるように廊下に新聞を置いて、新聞を購読していない家庭の生徒にも新聞に親しみやすい環境を作った。並べて置くと、同じ事件でも、新聞社によって取り上げ方が異なることに気づいた生徒もいた。

生徒の感想

- ・水不足が深刻な地域の新聞では、ダムの貯水率を毎回載せていることに興味を持った。
- ・ダムの貯水率が低くても、水不足の影響の少ない自分の地域で降雨実験をするのに反対しているという話を聞いて、難しい問題だと感じた。

所感

新聞記事の中から、環境に関する記事がわかりやすくまとめてあり、改めて環境について考えることができた。毎日自宅に届く、男女を問わず幅広い年齢層で読まれる新聞ということで、わかりやすい記事を書くために苦労されている様子が伝わった。

5・6時限目 思いを伝える(クラス内発表・学年発表会)

目標

作成したプレゼンテーションを相手にわかりやすく伝える工夫を行う。(5時限)
他クラスの生徒にわかりやすく工夫して伝える。また、しっかり話を聞く。(6時限)

内容

5時限目

新聞スクラップ発表(まだ終わっていない生徒)
班内プレゼンテーションリハーサル(クラス内発表会の前に、役割分担、内容の確認)
クラス内発表(1班から順番に)

<ココがポイント>

発表原稿を前で読むのではなく、聞き手の方を見てしっかり話をする。教室のみんなが聞こえるくらいの大きな声を出すように指導した。



クラス内発表会の様子

代表メンバーの決定

学年発表会でプレゼンテーションするメンバーを、相互評価カードを用いて選ぶ。

6時限目

各クラスの代表がそれぞれのテーマで学習した内容をプレゼンテーションする。



学年発表会の様子

<ココがポイント>

クラス内発表会と同じ内容で発表するのではなく、「全く授業に参加していない他のクラスの生徒に伝える」というのを押さえたうえで発表原稿を再考させた。また、できるだけ原稿を見ずに、自分の言葉で伝えるように指導した。

教室に戻り、自分たちがこの学習を通じて身についたと思えることを書かせる。

<ココがポイント> ~コピー機を使ってお手軽プレゼンテーション作成!~

最近のコピー機は、多機能になっており、スキャナー機能もついている。しかも ADF(オートドキュメントフィーダー)が付いているので、原稿をセットすれば数分で、数十枚のシートがデジタル化できるようになっている。これをフラッシュメモリーに入れれば、そのまま大型ディスプレイやプロジェクタで拡大して再生できる。また、保存もできるので、次年度の生徒への見本等にも利用できる。

生徒の感想

多くの生徒が、「とても緊張した。」と書いていた。プレゼンテーションすることが楽しかったという生徒も、少数ではあるがいた。

所感

学年発表会では、自分の担当したクラスの生徒は、ほとんど原稿を見ず発表している様子を見て感動した。中国の環境についてのプレゼンテーションで、「中国の環境問題がなぜ日本と関係があるのだろう。」と思っていた生徒が、今回の学習を通じてそれが誤っていることに気づいたと言っていた生徒がいた。「風が吹けば桶屋がもうかる。」と最初に検索したことの本当の意味に気づいてくれたようだ。

参考資料

・参考文献
 開発教育支援教材 『砂漠化する惑星(ほし)』 JICA 地球ひろば
 『兵庫教育 平成 22 年 12 月号』 兵庫県教育委員会
 『朝日新聞 NIE 特集 ののちゃんの自由研究』 朝日新聞社
 四国新聞社 朝刊 四国新聞社

・参考ホームページ URL
<http://w2.avis.ne.jp/~amane/> 工房あまね(ソーラークッカー製造元)
<http://www.shikoku-np.co.jp/> 四国新聞社

使用したプレゼンテーション(一部抜粋)

<p>中国紹介</p> 	<p>中国クイズ(これは何と読むでしょう)</p> <p>手机 </p> <p>ヒント 手の機械??</p>	<p>モンゴルについて</p> 
<p>北京といえば北京ダック</p>	<p>机は desk ではなく機械</p>	<p>内モンゴルの羊・ヤギ</p>
<p>カシミアブーム</p> <p>1着のセーターを作るのにカシミアヤギ4頭必要! たくさん取れないため・・高価</p>  <p>収入を増やすためたくさん飼</p>	<p>そうすると</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過放牧 ・根まで食べる  <p>砂漠化がすすんでしま</p>	<p>太陽光・風力発電</p> 
<p>はやりのカシミアですが・・</p>	<p>日本にも責任があるのでは?</p>	<p>高速道路に沿って何十キロも続く</p>

生徒のプレゼンテーション(学年発表会で使用したもの)

<p>環境学習</p> <p>メディアから考える環境問題</p> <p>3年1組</p> 	<p>中国内モンゴルの石少漠</p>  <p>石少漠</p>	<p>ソーラークッカー</p>  <p>● 太陽の光が強い日はヒュウが暖かくなる。 ● 普通の火で調理するよりも早い。1-2時間以内で調理可能。</p>
	<p>新聞スクラップ</p> 	<p>私達で空33</p> <p>STOP 地球温暖化</p> <p>大切な地球</p> <p>-まとめ-</p> 

『「違い」を知って作る「自分のものさし」』

学校名・名前・担当教科：兵庫県立夢野台高等学校 阿部 恵子（家庭科）
実践教科：人権学習・家庭科・総合的な学習の時間
指導時数：5時間
対象学年：高校1年生 対象人数：240人

< 教師海外研修を通して感じたこと >

JICA の取り組みについては以前から関心を抱いていた私であったが、語学力と知見の不足で生じる自信の無さが足を引っ張り、これまでは「開発教育」という教育活動さえ、遠巻きに見ていたところがあったように思う。

日本が中国に行く ODA について学んだ9日間は非常に内容が深く、常に学びと気づきの連続で「百聞は一見に如かず」ということを改めて感じた。研修への参加に理解を示し、その成果に耳を傾け授業実践に協力して下さった職場の先生方の様子、そして昨今の国際情勢から、開発教育の果たす役割が重要性を増しているのではないかと感じている。

教師海外研修に参加して私は、ココが変わった！

BEFORE

多感な時期に教科書検定問題でアジア世論が揺れる様子を見てきた世代であるため、歴史認識の点において過剰な自虐意識があった。

最近の中国に関する外交上の問題とその報道に、生徒が何を感じどのように影響を受けているのか不安に思うところがあった。

ODA の現場は報道を通じてしか見たことがないため、時折沸き起こる ODA 廃止論に対し、議論できるだけの材料を持っていなかった。

AFTER

国内で働く中国人に対し、気軽に声を掛けられるようになった。

授業実践に向け準備する過程で、中国の抱える課題に目が向くようになり、客観的な視点で、この隣国との関係を捉えるようになった。

日本がこれまでどのような対中 ODA を行ってきたかを知って納得できた。また、経済成長の著しい中国ではあるが、「縁の下の力持ち」という存在があってこそ、発展の恩恵は人々に還元されていくのだと思うようになった。

授業の詳細

1. カリキュラム

(1)実践の目的/背景

これまで調理実習や食品衛生の授業をする時、生徒の間から出て来る中国に関する発言に、拭いようのない意識が、何かを通じて彼らに植え付けられているのではなかろうかと、私は感じるがあった。確かに、2002年の冷凍ほうれんそう農薬検出事件に端を発した中国の食品安全に関する報道は衝撃を与えるものであったろう。しかし、わが国の食料自給率の低さを棚に上げての中国批判に、若い世代が安易に同調するさまは、私たち大人の傲慢さを写し取ったかのようにも見える。また最近、外交上の諸問題の報道を受けて、さらに否定的・攻撃的な見方をする若い世代が増えているようで不安を感じてしまう。

日本人のこのような意識状況をもたらす背景には、自然的・地理的・歴史的諸条件など広義の Cultural background を有し「気心の知れた間柄」の中で暮らしてきた我が国の特質、とする見方もある。日本は複数の民族と文化の融合体であるものの同質性や均質性が高くなる社会であることは否定できない。実際、本校にも中国と深い関わりのある家族構成を持つ生徒が複数在籍するが、本校のように穏やかな学校であっても、関係を周囲に悟られまいとする生徒もいるほどである。地球規模で影響を与え合う「相互依存」の関係にある世界の中で、特性や文化を言い訳にした意識や感覚は、これからの足枷となりはしないだろうか。

アイデンティティーを考えることは、自分が所属しない領域との違いを区別することに始まる。その際、偏った情報が抽入されると区別は差別へと変質する。エスノセントリズムなどはその典型であって、過去にこの国で起こった失敗が繰り返されないようにするためにも、高校生という知的発達著しい時期にこそ、世界の国々について歴史や伝統・社会背景などさまざまな視点から捉え、多元的な価値観を尊重できるようになるよう丁寧に導く作業が必要と言える。

そして、その方法として「開発教育」を取り上げ、「家庭科」を連携させることは有効であると考え。定義は他に譲るとして、「開発教育で考える」ということは、「地球市民の生活について心を寄せ、当事者意識をもって諸問題の解決を考える」ということであり、家庭科教育の目指すところである生活者としてのシティズンシップ教育と相通じるものだと考えるからである。また、さまざまな学習の機会、特に「人権学習」や「総合的な学習の時間」とつながりを持たせ、生徒を中心に据えて丁寧に授業展開していくことが大切と考える。

(2)授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1～2時限目 地球市民になるために	プリントワーク ・私達が陥りやすい「思い込み」を体験的に理解する グループディスカッション ・自己概念形成に人間関係がどう影響を与えるのか ・ステレオタイプなものの見方と人権感覚を考える 兵庫県教育委員会事務局人権教育課主任指導主事による講話 「多文化共生社会の創造のために」 ・県下の日本語指導が必要な外国人児童生徒について ・人権の視点から見た教師海外研修（中華人民共和国） ・よりよい子ども多文化共生社会の創造のために	・プリント ・写真資料 ・パワーポイント

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
<p>3時限目</p> <p>「中華」を堪能 -衣食から学ぶ 中国の地理と歴史-</p>	<p>①「中華」という国名の意味するところを考える</p> <p>②世界における中華料理の位置づけを知る</p> <p>③食から考察する中国の地理的背景 ・料理と各地域の風土 ・「三逃の大地」、内陸乾燥地域と苳麵 ・アジアにおける文化要素の共通性 -茶・稲・発酵・絹-</p> <p>④服飾から考察する中国の多様性と歴史 ・呉服の「呉」とはどういう意味か ・中国の服飾史を概観する ・背広の源流は蒙古にあり？！ ・被服の素材(綿・麻・絹・毛・カシミア)を観察</p>	<p>・地図</p> <p>・教材プリント ・食べ合わせポスター ・NHKビデオ映像 「人間は何を食べてきたか」 ・苳麵の写真</p> <p>・呉服 ・中国の書籍 「中国伝統服飾図鑑」 ・NHKビデオ映像 「ファッションドリーム」</p>
<p>4時限目</p> <p>中国・内蒙古 Now 砂漠化の現状とその背景</p>	<p>①ワークシート 「買い物チェックリスト 繊維製品編」</p> <p>②フォトランゲージ「内蒙古自治区」 ・内モンゴルの現状について感じたことを記述する</p> <p>③グループ討議「内蒙古自治区の砂漠化の原因とは」 ・砂漠化がなぜ進行したのか</p> <p>④フォトランゲージ「私たちの生活と内蒙古自治区」 ・砂漠化の原因に私たちの生活が関与したことに気づく ・砂漠化が進行するとどうなるのかを考える</p> <p>⑤ブレインストーミング「STOP！砂漠化」 ・砂漠化を止めるために何が必要か考える</p> <p>⑥スライドショー「比べてみよう 内蒙古と北京」 ・映像比較をもとに、中国内陸部と沿岸部の格差を知る ・若い世代が街に出て行く背景を考える</p>	<p>・ワークシート ・カシミア製品</p> <p>・写真</p> <p>・葛根湯 ・カシミア製品の広告 ・内モンゴルの白布</p> <p>・付箋、色ペン、模造紙</p> <p>・パワーポイント ・資料「高校生の日常生活に関する調査-日本・米国・中国の3カ国の比較-」</p>
<p>5時限目</p> <p>国際協力について 考えよう</p>	<p>①前時「STOP！砂漠化」の総括</p> <p>②スライドショー「JICAが行う砂漠化防止の支援」</p> <p>③スライドショー「日本が中国各地で行う政府開発援助」 ・JICAの役割とJICAがおこなう国際協力を知る ・政府開発援助(ODA)の内容と歴史について理解する ・国際協力が、先進国たる資格であることに気づく</p> <p>④フォトランゲージ「日本救援隊黙哀」 ・中国人の心を動かした写真にみる、日本の「礼」 ・「支援」の根底にあるものは何なのか考える</p> <p>⑤グループワーク／作文「わたしにできる国際協力」 ・JICAの地域別取り組みについて知る ・各団体の行う国際協力とJICAの関わりを知る ・「人による支援」の大切さ、自分にできる協力を気づく</p> <p>⑥地球市民として考えよう ・課題を身近にとらえる「当事者意識」の大切さに気づく</p>	<p>・パワーポイント</p> <p>・日本の新聞記事</p> <p>・中国の新聞記事</p> <p>・JICA要請一覧 (青年海外協力隊) ・NGO団体資料</p> <p>・ワークシート 「直径1.5mで考える地球」</p>

2. 授業の詳細

1～2時限目 「地球市民になるために」

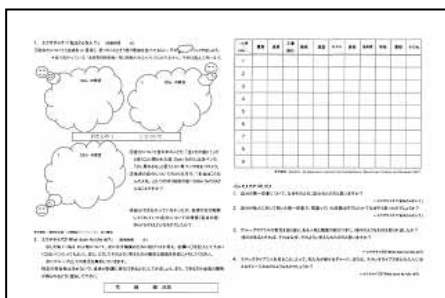
目標

ホームルーム活動の人権学習を活用し、一連の授業を行う前の意識付けを行う。

内容（詳細は永峰教諭の頁を参照）

1時間目（各クラスで実施）

私たちが陥りやすい「思い込み」を体験的に理解する。
ステレオタイプなものの見方がもたらす影響を考える。



1時間目に用いたプリントと資

生徒の反応

1時間目の授業では、生徒の発言が活発に行き交った。特定の人種と職業を結びつけて考える傾向があると気づいた様子であった。

2時間目の講演は、多様なものとの見え方の必要性を実感した様子であった。

2時間目（学年全体で実施）

兵庫県教育委員会事務局人権教育課 永峰恵介教諭の講話

「多文化共生社会の創造のために」

- ・県下の日本語指導が必要な外国人児童生徒について
- ・人権の視点から見た教師海外研修（中華人民共和国）
- ・よりよい子ども多文化共生社会の創造のために



兵庫県教育委員会指導主事の講話

生徒の感想

- ・私個人の考えや常識が全てなのではなく、周りの意見や考えも知るの大切だと思った。
- ・顔や肌の色によって、自分が少し違う見方（＝「偏見」）を持っていることに気がついた。
- ・時代が変われば外国人の子どもが日本の学校で勉強することも多くなり、支援がいると思った。
- ・家族や友達、世界の人々と心でつながれるようになってほしいと思いました。

3時限目 「「中華」を堪能 衣食から学ぶ中国の地理と歴史」

■目標

中華思想のバックグラウンドを理解するために、中国の多様性を地理的・歴史的見地から考察する。それらを通して、わが国と中国との長い関わり合いを再認識する。

■内容

- ①「中華」という国名の意味するところを考える
- ②世界における中華料理の位置づけを知る

生徒の反応

英語科と国際理解教育係に協力を戴き、事前実習として本校 ALT を囲んでワンタン作りを行った。カナダ人として育った彼が中華料理を大切に捉えていて、その話と手際よく作る姿に生徒は多くを学んだ様子だった。

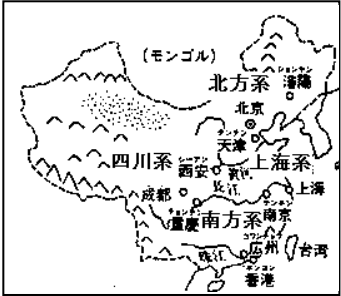


事前実習：中国系カナダ人 ALT とのワンタン作り

③食から考察する中国の地理的背景

- ・料理が各地域の風土と密接に関わっていることを知る。
 北方系料理： 宮廷料理として発達した北京料理など。
 寒冷地なので肉や油脂を多く用いた料理や鍋料理が有名。
 小麦粉を用いた包子、麺も常食とされている。
- 南方系料理： 広東を中心とした料理を指す。北京に匹敵する長い歴史をもつ地域で、亜熱帯で産物が豊富。古くから外国や各地とも交易が盛んで特に北京要人たちの往来が多く、これにより北京の調理技術が導入され広東料理を作り上げた。ふかのひれ、つばめの巣、くまの手など、特殊なものが料理の材料として珍重される。
- 上海系料理： 河や海に面しているので魚介類の料理で有名。産物が豊かで特に米の主生産地であるため、米飯に合う料理が多い。各国の租界があったので、広東料理と同様、洋風の影響を大きく受けている。
- 四川料理： 長江上流の山岳地帯にある盆地、四川省。この首都である成都を中心とした料理。海から遠く隔たった地域なので海産物は少なく、漬物など食品の保存加工が発達した。また風土病の多かった地域なので、香辛料や薬味をたっぷり使った刺激の強い料理が特徴。

生徒の反応
 なじみある中華料理を題材に用いたため、盛り上がった。料理自体を知っているため、風土の違いが理解しやすかったようだ。



- ・苳麵の写真を見てその調理法と食べ方の特徴を考える。



蒸しがあがった苳麵



羊肉の入ったつけ汁

<ココがポイント>
 非常に腹持ちが良く、穀類・野菜が多くない乾燥地域の大切なビタミン・ミネラル源でもある。

「三逃の大地」
 中国山西省の黄土高原は痩せた土壌で、肥料も種も土も残らない「三逃の大地」と呼ばれ雑穀しか育たない。雑穀をいかに食べるかという工夫の中から麺が誕生したと言われる。小麦が多く採れないこの地域で古くから食されてきた苳麵(ゆうめん)はオート麦(燕麦)を原料とする。小麦粉のように細長く加工、調理することが難しいため、ところてんのように押し出して成型し、茹でずに蒸して用いる。

- ・「三逃の大地」と言われる山西省や内蒙古自治区などの、内陸乾燥地域の厳しい自然環境を知る。
- ・茶、稲作、発酵、養蚕等の文化要素は、古くから中国雲南省を中心として西はインドのアッサム地方やブータン、東は中国の湖南省にかけて共通している、という見方も知る。

④服飾から考察する中国の多様性と歴史

- ・「呉服 = 呉から伝わった綾織」であることを知る。

<ココがポイント>
 大阪府池田市室町の**呉服(くれは)神社**は、機織(はたおり)と縫製を伝えるため大陸から渡った2人の織姫が祀られる。

<ココがポイント>
 漢民族の王朝(漢・唐・宋・明) ゆったりとした**寛衣形**
 その他の民族の王朝(元、清) 身体にぴったり合う**窄衣形**
 (馬上の動作が容易な騎馬民族様式)

- ・中国各王朝の服飾をスライドショーで概観する。
- ・背広の原型が、中央アジア騎馬民族の衣装に遡ることを知る。
- ・中国が多様な民族から成り、それぞれに優れた技術や文化があったことを理解する。
- ・被服素材(綿・麻・絹・毛・カシミア)に触れ、特徴や感じたことをプリントにまとめる。

◎生徒の感想
 ・中国の人が「私は中国の全てを知っているわけではないですが」と言う、その意味が分かった。

4 時限目 「中国・内モンゴ Now」

■目標

内モンゴ自治区の現状を例にあげ中国の抱える課題を知り、その背景を考察する。
また、その課題が私たちの生活と無関係ではないことに気付き、地球規模の環境保全問題として私たちが共に取り組むべき課題であることを理解する。

内容

ワークシート「買い物チェックリスト 繊維製品編」

フォトランゲージ「内モンゴ自治区」

- ・下の写真を見て、現在の内モンゴ自治区がどのような場所であると思うか記述する。



中央分離帯上の風力発電装置



杭锦旗 新しいプラントの建設



羊を連れた牧民

グループ討議「内モンゴ自治区の砂漠化の原因とは」

- ・写真 から、日本列島がすっかり入る面積の内モンゴ自治区で何が起きているのかを考える。

フォトランゲージ「私たちの生活と内モンゴ自治区」

- ・この地域では、昔から自然に感謝する思想があることを知る。
- ・ワークシート をもとに、私たちの生活や意識も砂漠化の進行に関与したことに気付く。



天や地に感謝を捧げる習慣



カシミア製品の広告

<ココがポイント>

内モンゴルの砂漠化の要因

自然環境...薄い土壌で、一度緑性が失われると自然回復が困難。
政府の方針...漢民族の移住
計画なしの開墾 遊牧民の生活場所が限定 定住し開墾が進む

ブレインストーミング「STOP! 砂漠化」

- ・砂漠化を防ぐために必要な条件と手立てを考える。
- ・できるだけ多く思い浮かべた後、意見を整理する。

スライドショー「比べてみよう 内モンゴと北京」

- ・内陸部と沿岸部の所得格差や生活水準の格差を知る。
- ・中国の一人っ子政策と過熱する早期教育の現状を知る。
- ・若い世代が街に出ていこうとする、その背景を考える。

生徒の反応

授業の始め、カシミアの手触りに喜んでいたら生徒は、「こんなこと知らんと買ったら恥やったわ。」と授業の終わりには呟いた。

生徒の感想

- ・過放牧により家畜が植物の根まで食べてしまって育たなくなる、ということは知っていたけど日本列島がすっかり入る広さの土地で、これほどまで砂漠化が進行しているとは思わなかった。
- ・こんなに砂の多い場所に住むのは容易ではないだろう。自分なら、街に出ていく選択をすると思う。でも、人が住まなくなると砂漠化はどんどん進んでいこう。

5 時限目 「 国際協力について考えよう 」

■ 目標

開発途上国の経済・社会の開発、復興、安定に寄与する政府開発援助(ODA)について知り、日本が世界で行っているさまざまな国際協力を身近なものとしてとらえる。

内容

前時のブレインストーミング「STOP！砂漠化」総括

スライドショー「JICA が行う砂漠化防止の支援」

- ・ JICA (独立行政法人国際協力機構) が行う内モンゴル自治区での砂漠化防止の支援を知る。



技術協力
(草原における環境保全型節水灌漑モデル事業)



有償資金協力
(内モンゴル自治区植林植草事業)



無償資金協力
(リハビリ用可動式調理台)
* 左下に JICA 印がある

スライドショー「日本が中国各地で行う政府開発援助 (ODA)」

- ・ 戦後の日本も諸外国の援助を受けた歴史を知り、支援が先進国の役目であることに気づく。
- ・ わが国の政府開発援助の内容・特徴を知る。
- ・ 日本の行う ODA が、関係者に感謝されている様子を知る。

フォトランゲージ「日本救援隊黙哀」

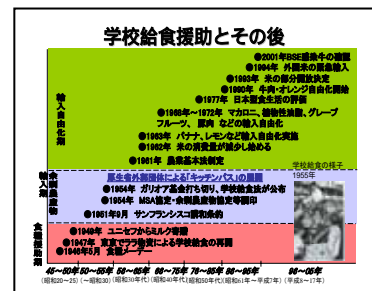
- ・ 四川大地震被災地における日本の国際緊急援助隊の写真を見る。
- ・ 中国人の反応を紹介、なぜ彼らが感動したのかを考える。
- ・ 「支援」の根底にあるべきものは何なのか、を考える。



新華社通信の伝えた映像

グループワーク / 作文「わたしにできる国際協力」

- ・ 日本が受けた援助の一つ「学校給食」を例に、続き方によって、援助も様々な見方につながってしまうことを頭に入れる。
- ・ 「望ましい支援」とはどのようなものか、それぞれ意見を述べる。
- ・ JICA の地域別取り組みと支援を知る。
- ・ 青年海外協力隊の要請一覧を見て、各開発途上国が必要としている「人による支援」について知る。
- ・ 各 NPO 組織の行う国際協力と JICA の関わりを知る。



給食援助とその後

地球市民として考えよう「直径 1.5m サイズで考える地球」

- ・ 環境問題をはじめとした地球規模の諸課題を身近なものとして意識する。
- ・ 相互に依存する世界の中で、一国だけが繁栄を享受するわけにはいかないことを理解する。
- ・ 世界の中の日本の立場と役割を考え、問題解決への姿勢を養う。

生徒の感想

- ・ 意見が食い違っても、お互いを理解しようとするれば仲直りだってできるし、上手くやっていると。言葉足らずで誤解しないようにしないとけない。
- ・ 技術とか資格があるというんな貢献ができるから、そういう方向もいいのかもしれないと思った。
- ・ 世界のいろんな人たち、彼らが何を幸せとするのか知って、私は「自分のものさし」を作りたい。

◎所感

あるクラスで「内蒙古自治区における砂漠化の原因は何？」と問いかけたところ、「地球温暖化」「焼畑農業」などの回答が出てきて戸惑いを覚えた。受験で詰め込み覚えた事項が、連動した「知」となっていないことの現れなのかと思った。フォトランゲージの手法を繰り返して用いることで的外れな議論に終始することなくスムーズに進められるようになったが、他にディスカッションやブレインストーミングも取り入れたため、一つの事をより深く議論できなかつたと感じた生徒もいたようだった。多元的な価値観を尊重する態度を育むためにも、互いの意見を聴き、表明し合う「議論」という場は大切であるから、これを上手く設けるゆとりと技量が必要だと感じた。

3. 成果と課題

我々の生活が世界との相互依存の上に成り立っていることを伝える機会が、私の担当する家庭科の中には数多くある。そのため、教科の中に研修の成果を組み込むことは難しくはないと感じていて、開発教育を家庭科に特化してみたいという思いさえあった。ところが、授業実践の頃と中国との間で外交上の諸問題が発生した時期とが重なり、授業の本来的な目的が曲解されそうな不安を感じるようになった。そのため思い切って展開を変え、人権学習や総合的な学習の時間を活用することとしたが、そのことが授業の幅を広げることにつながったと実感した。

授業を進めていて、生徒たちが、中国と関わりある生徒の喋る美しい中国語の発音に感嘆の声をあげ、純粋な興味から様々な問いかけをしている様子を目にした時、彼らの中に「違いを素直に受容できる『可塑性』」を感じ、これが私には大変な励みとなった。また、「なぜこの授業をするのですか？」と言いつつも、中国語を披露してくれた生徒のいきいきとした眼差しに、私の中にあった不安感が拭われた気持ちがあった。そして、中国を理解するために文化をはじめとした様々な比較を行ったが、その要素を追求する過程において、先達がどのように創意工夫を重ねて継承・発展させてきたのかを改めて知ることになり、はからずも自国の肯定に繋がったと感じている。

内蒙古師範大学で日本語教員として活躍されている、青年海外協力隊の安田隊員のお力添えで、師範大学生との手紙を通じた交流も始まっている。お互いが尊重し合うこの関係を長く継続させていくことを課題とし、開発教育実践の裾野に位置する一人として今後も研鑽を積んでいきたい。

参考資料

授業実践 1～2 時間目

『地球市民を育む学習 Global Teacher、Global Learner-』中川喜代子、明石書店

『地球の食卓 世界 24 カ国の家族のごはん』ピーター・メンツェル、TOTO 出版

授業実践 3 時間目

『食の倫理を問う』安本教傳、昭和堂

『日本料理文化史』熊倉功夫、人文書院

『中国伝統服飾図鑑』李薇、東方出版社

『日本女性服飾史』井筒雅風、光琳社出版

授業実践 4 時間目

『高校生の日常生活に関する調査 日本・米国・中国の 3 カ国の比較』(財)一ツ橋文芸教育振興会

授業実践 5 時間目

『中国全省を読む地図』莫邦富、新潮社

『青年海外協力隊 要請一覧』JICA

『家庭科教育 68 巻 14 号』家政教育社

『内モンゴルの砂漠化について考える』

学校名・名前・担当教科：甲南高等学校 澤武 潤子（英語科）
実践教科：時事英語
指導時数：20 時間
対象学年：高校3年生 対象人数：8人

< 教師海外研修を通して感じたこと >

日本大使館への攻撃や尖閣諸島問題などもあり、中国 = 反日という構図が私の中でできあがっていたが、如何に一元的な物事の捉え方かということを感じ知らされた。テレビをつければ反日的内容のテレビ番組も放送されており、日本に対してあまり良い感情を持たない中国人もいるのだが、それが全てではない。中国の砂漠化を防止するために精力を尽くした日本人遠山正瑛氏のようになりたいと砂漠緑化活動に取り組む中国人もいれば、日本のODAのお陰で中国最新のリハビリセンターができたと感謝する中国人もいる。日本語を第二外国語として、朝7時から勉強する中国人高校生・大学生も数多くおり、日本のイメージを聞けば、「美しい」・「革新的」・「親切」・「自由」など肯定的な返事が多く返ってくる。如何に私自身がマスメディアの情報を鵜呑みにしていたかが分かり、物事を多面的に捉える姿勢を常に持つ必要があると強く感じた。研修を通じて私が知りえた中国も、中国の一部にはすぎないが、私が知った中国を生徒に伝え、生徒も自分の目で見てみたいと感じてくれれば、日中の交流発展につながるのではないかと感じる。

BEFORE

交通マナーを守らない。
自転車利用者がものすごく多い。
中国 = 反日というイメージがあり、日本のことを良く思っていない人達がほとんどである。
アジア諸国との交流に大して興味はない。

AFTER

交通マナーは思っていたより良くなっていた。
自転車利用者が多いが、以前と比べて少なくなっている。
反日テレビ番組等があったが、全ての人が日本に対して悪いイメージを持っているわけではない。
アジア諸国との交流を始める必要性を感じ、交流先、交流方法を模索中である。

授業の詳細

1. カリキュラム

(1) 実践の目的/背景

高校3年生選択授業時事英語では、生徒が普段あまり知らないトピックに関して、できるだけ身近に話せる題材の新聞記事や雑誌記事を読み、それに関するビデオや映画を視聴し、世界の様々な問題への理解を深める授業展開を行っている。

今夏、JICAの教師海外研修に参加し、10年ぶりに行った北京の空を見て、光化学スモッグだけでなく、黄砂による影響もかなりあると感じた。実際、内モンゴルの奥地へ行けば行くほど緑の量は減り、中国大陸の砂漠化は進んでいることを目のあたりにした。日本でも時々中国の黄砂に関する報道はあるが、そこまで深刻に進んでいるとは考えていなかったため驚きであり、単なる隣国の問題ではないと改めて感じた。また、この砂漠化を止めようと数多くの日本の団体が植林活動をしており、当初は「お金にならない。」と言って、植林事業には積極的ではなかった中国人が、今では進んで植林に取り組んでいる姿を見て、考え方を考える中国人もいることを知った。そのような中国人の中には、植林事業の先駆者となった鳥取大学名誉教授の遠山正瑛氏のことを非常に尊敬している人もおり、中国=反日という短絡的な考えを改め、そうじゃない人もいることを伝える必要を感じた。

今回の実践では、授業構成を大きく9つに分け、前半は英語記事の読解、後半はプロジェクト活動とした。前半は砂漠化に関する一般的な内容の記事と内モンゴルでの砂漠化についての記事を英語で読みながら、砂漠化に関する英語の語彙力と砂漠化に関する一般的知識の構築に努めた。後半は生徒を5つの立場に分けて、(内モンゴルの放牧人 環境研究者 政府関係 石炭会社 旅行者)それぞれの立場から書かれた英語の記事を読み、それぞれの立場で、パワーポイントを用いて英語で発表させた。最終的にはお互いが納得できる解決方法を考えさせ、相互が持続可能な発展のためにはどうすればよいのかという視点を持たせたい。

(2) 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 中国を知る	<ul style="list-style-type: none">・ 中国のイメージ・ 中国の地理的概要・ 中国の暮らし・ 中国の砂漠化	<ul style="list-style-type: none">・ 写真 (パワーポイント)・ ビデオ・ 中国土産
2 時限目～10 時間目 砂漠化を知る	<ul style="list-style-type: none">・ 砂漠と砂漠化に関する記事を読む・ 中国内モンゴルの砂漠化に関する記事を読む。・ 砂漠化に関する英語語彙の構築。・ パワーポイントを使った英語の発表を聞く。	<ul style="list-style-type: none">・ パワーポイント・ 英語記事・ プリント
11 時限目 中国の砂漠化と遠山正瑛について知る	<ul style="list-style-type: none">・ 中国の砂漠化阻止のために活躍した日本人が沢山いることを知る。・ 考え方を考える中国人がいることを知る。	<ul style="list-style-type: none">・ DVD プロジェクトX 「運命のゴビ砂漠」
12 時限目 中国を知る	<ul style="list-style-type: none">・ ゲストスピーカー永峰さんの話を聞いて、中国の理解を深める。	

13 時限目～16 時限目 プロジェクト準備	<ul style="list-style-type: none"> ・各自与えられた役割（内モンゴルの放牧人 環境研究者 政府関係 石炭会社 旅行者・旅行会社）に関する記事を読み、Power Point を作成し、発表の準備をする。 ・パワーポイントの使用方法 ・パワーポイントを使った英語での発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語記事 ・パワーポイント
17～20 時限目 発表	<ul style="list-style-type: none"> ・個人の発表を聞き、各立場での言い分を理解する ・相互持続可能な発展のためにどうすればよいかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント

2 . 授業の詳細

1 時間目 「中国を知る」

目標

- 中国に関する基礎知識をつける
- 教師海外研修で訪問したところを知る
- いろんな中国人がいることを知る

内容

- 中国に関する知識をつける(人口、面積など)
- 中国へのイメージを話し合う

生徒の反応

模倣・真似の文化 / 秩序がない / 文化大革命 / 万里の長城 / 中華料理 / 上海万博 毒入り餃子 / 社会主義国 / 人口が多い / 一人っ子政策 / 反日教育

- 教師海外研修の旅程を紹介
- 高校生との交流について
- 村民との交流について

生徒の感想

- ・中国のお菓子にはおいしいものもある。
- ・中国の村民は楽しそうな人達だった。
- ・思っていた中国と違い、楽しそうな雰囲気を感じた。
- ・中国人の村民の多くがたばこを吸っていたことにびっくりした。
- ・中国の村民の多くが中高年層の人達が幼い子供しかいない。
- ・中国人高校生が日本に対してプラスのイメージを持っていたのが意外だった。

所感

海外研修中に行った、村民及び中国の高校生との交流についての話が中心となった。私自身が非常に楽しんだこともあり、その楽しさをそのまま生徒に伝えたため、生徒達は中国に対するイメージが随分変わったようだった。あくまでも私が体験した中国であり、中国の一面にすぎないことを強調したが、中国へ行ってみてもいいと感じた生徒が数名いたことは嬉しかった。

2 時限目 ~ 10 時間目 「砂漠化を知る」

目標

- 砂漠に関する基礎知識をつける
- 中国の砂漠化の現状を知る
- 砂漠化に関する基本語彙を知る
- パワーポイントでの発表の仕方を知る

内容

砂漠、砂漠化に関する基本語彙を知る 資料



授業のようす

<ココがポイント>

desertification, deforestation などの日常会話ではあまり使用しない語彙を知り、英文記事の内容理解につなげる。

砂漠、砂漠化に関する英文記事を読む

<ココがポイント>

砂漠の基礎知識を知る。砂漠にはどのような植物、動物があり、砂漠に住む人はどのようにして生計を立てているのかを知る。

内モンゴルの砂漠化に関する英文記事を読む

<ココがポイント>

砂漠化の原因には、自然的要因と人的要因があることを知る。また砂漠化のメカニズム、砂漠化の進行度合いについても知る。

読んだ記事に関するパワーポイントでの発表を聞く

<ココがポイント>

、で読んだ英文記事に関する発表を聞き、内容理解の確認とパワーポイントでの発表イメージを持たせる。聞き手が理解しやすいパワーポイントとはどのようなものか、絵や写真の効果的使用方法についても考えさせる。

What are deserts?

- Deserts are very dry places.
- Hot deserts
 - located near the equator.
 - have hot days and cold nights.
- Cold deserts
 - located away from the equator.
 - have ice and snow in winter
- The Sahara Hot deserts
- The Gobi Cold deserts



授業に用いたパワーポイント

生徒の感想

- ・砂漠に hot desert と cold desert があるのを初めて知り、雪が降る砂漠もあることを知った。
- ・砂漠に住む人たちもいることを知った。(砂漠に住めることなんてありえないと思っていた。)
- ・砂漠化の原因は数多くあることを知った。
- ・砂漠化が思っていた以上のスピードで進行していることにびっくりした。

所感

砂漠・砂漠化についての知識が私自身もあまりなかったこともあり、授業を構築する上で大変勉強になった。砂漠化の原因、砂漠化がもたらす影響について生徒達も全く知識がなく、生徒は興味関心を持って授業に臨んだ。モデルになる発表をパワーポイントで行ったが、パワーポイントを使用する発表の注意点をもう少し詳細に伝えておくべきだったと思う。

1 1 時間目 「中国の砂漠化と遠山正瑛について知る」

目標

- 中国の砂漠化について映像で知る
- 中国砂漠緑化に尽力した日本人遠山正瑛氏について知る
- 遠山正瑛氏の志を引継いでいる多くの中国人、日本人がいることを知る
- 国際協力について考える

内容

- NHK プロジェクト X 「運命のゴビ沙漠」 を見る
- 中国で出会った砂漠緑化活動に取り組む村民の話を見る
- 国際協力の在り方について考える

所感

砂漠化を阻止しようと活躍した日本人がいたこと、その日本人を尊敬している中国人の話聞き、感銘を受けた生徒もいたようだった。私自身、中国訪問前にこの DVD を視聴し、実際中国の村民から遠山氏の名前が出た時は非常に嬉しく思った。同じように生徒も感じてくれているといいのだが。

1 2 時間目 「中国を知る 」

目標

- 同じ研修に参加した永峰教諭の話聞き、中国の理解をさらに深める

内容

- 永峰教諭の見た中国について話を聞く
- 質疑応答

所感

永峰教諭が「私が見た中国は中国の一部にすぎない。」ということを強調されており、自分の目で見ても確かめ、判断する重要性を話してくれたのは、情報に溢れている今を生きる高校生には心に響くメッセージだった。

1 3 ~ 1 6 時間目 「プロジェクト準備」

目標

- 与えられた役割に関する英文記事を読み、聞き手が分かりやすい発表を構築する
- パワーポイントの使い方を知る

内容

- プロジェクトの概要説明

<ココがポイント>

生徒を5つの役割に分類し（内モンゴルの放牧人、環境研究者、政府関係、石炭会社、旅行者・旅行会社）それぞれの立場に関連した英文記事を読ませた。記事を元に各自の与えられた役割の視点から、砂漠化についての意見をパワーポイントを用いて、8分程度で英語で発表するよう指示した。

英文記事の読解

資料収集

パワーポイントの作成

所感

英文記事の内容が少し難しいものもあり、苦労していた生徒もいた。文字だけのパワーポイント作成者が目立ち、絵、写真、グラフなどの視覚に訴えやすいものを使用するよう適宜指導した。

17～20時間目 「発表」

目標

- 聞き手に分かりやすい発表をする
- 設定時間内に発表をする
- 聞き手からの質疑応答に適切に回答できる

内容

- 各自立場から、砂漠化について話をする
- 質疑応答
- 教員、英語アシスタントティーチャーからのコメントを聞く



発表のようす

<ココがポイント>

フィードバックをすぐすることで、発表の改善点や理解していなかった点がすぐに分かり、聞いている他の生徒達にとっても、発表の仕方を考える上でとても参考になる。

所感

生徒は積極的に取り組み、発表をしている生徒の改善点をうまく取り入れ、回を追うごとに発表技術が向上していった。それぞれの発表を元に、どのように解決していけばよいかを議論したかったが、生徒の英語力、時間の都合でできなかったのが残念である。

3. 成果と課題

旅程を見て、研修の目玉は、中国の環境問題への取り組みを見に行くところにあると感じた。海外研修前に中国緑化活動に関する資料や本を可能な限り集め、おもしろそうなものを読み、DVD やテレビ番組なども数本見ておいた。中国にて、自分が見たり、読んだりしたものが実際あったり、話の中に出てくるとすべてが関連付けられ、記憶の中に鮮明に残る。特に、鳥取大学名誉教授遠山正瑛氏についてのDVDを事前に見ていたことはとても大きく、中国の村民の一人から「遠山先生を尊敬しており、彼のように中国の砂漠緑化に今後も奉仕していきたい。」という言葉聞いた時に、中国の緑化活動についての授業を展開し、遠山氏の偉業について生徒にぜひ知ってほしいと感じた。

授業実践は2学期間継続して行い、私自身だけでなく、生徒にとっても砂漠に関する基礎知識、砂漠化の原因、中国の砂漠化と緑化活動の現状について知ることができ、有意義なものだったと思う。また、遠山正瑛氏という素晴らしい日本人が、中国の砂漠緑化に尽力し、今も彼の意志が引継がれているということを生徒に伝えることができたのは重要であった。遠山氏の事例が、生徒達が国際協力のあるべき姿とはどういうものかを考えるきっかけになり、多少は国際的視野を養えたのではないかと思う。

今後の課題としては、他教科との連携である。時事英語という授業枠の中で、英語という言葉を使用しての授業展開でなければならず、母語である日本語を使っただけの授業展開であれば、もう少し各立場（内モンゴル放牧人、環境研究者、政府関係、石炭会社、旅行者・旅行会社）からの意見を具体的に述べ、相互が持続可能な発展のためにはどうすればよいのかという議論が活発にできたのではないかと思う。英語の時間で、英語でしか知りえない情報を理解し、その内容を元に、社会や総合学習の時間で、日本語で議論するという展開ができれば、生徒も物事を深く考え、いろんな意見を活発に議論できたのではないかと思う。

参考資料

・参考文献

- 池上 彰(2010) 『そうだったのか! 中国』 集英社
 上田 信(2009) 『叢書 中国の問題群 9』 岩波書店
 定方正毅(2000) 『中国で環境問題にとりくみ』 岩波新書
 根本 正之(2007) 『砂漠化ってなんだろう』 岩波ジュニア新書
 冊子『さばく第46号』 日本沙漠緑化実践協会

・参考ホームページ URL

<http://www.globaleducation.edu.au/global/education/pid/2030>
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A0%82%E6%BC%A0%E5%8C%96>

・参考TV番組

- NHK プロジェクトX 「運命のゴビ沙漠」
 BS スペシャル「緑の長城を築け」
 NHK スペシャル 激流中国 最終回 告発せよ 摘発せよ ~環境破壊との闘い~
 未来への提言 「環境保護活動家 楊勇~中国 13億人の水危機に挑む」

Deserts and desertification

Task 1 True or False

A. The 'World Day to Combat Desertification and Drought' is 17 June. ()

B. Nearly one-third of the earth is classed as arid or semi-arid desert. ()

C. An estimated six million hectares of productive land are lost every year because of desertification, land degradation and declining agricultural productivity. ()

D. More than 110 countries are affected by desertification. ()

E. Over 250 million people are directly affected by desertification and one billion people are at risk. These people include many of the world's poorest, most marginalized, and politically weak citizens. ()

F. The African continent is most affected by desertification. Two-thirds of the continent is desert or dry lands, almost three-quarters of which are degraded to some degree. ()

G. Roughly 27 per cent of the China's land mass is desertified, with an average of 2,460 square kilometers of land being lost to advancing deserts each year. Nearly 400 million people live in these areas, and the economic loss to China has been estimated at around US\$ 6.5 billion a year. ()

H. It is estimated that US\$42 billion is lost worldwide each year through desertification. ()

I. The Gobi desert is the biggest desert in the world. ()

Dust

- Overplowing and overgrazing are converging to create dust bowl.
- China has the strong winds of late winter and early spring can remove literary millions tons of topsoil on a single day.



How much money do we need to forestation.



- 480million Chinese yen (8bilon Japanese yen) use forestation in Alxa.
- =9.1hla forestation
- 40 poplar trees costs 1000 yen
- You can donate from internet

The Inner Mongolia Autonomous Region in North China has...

- natural resources
- the deposits of many minerals
- most of the rare-earth minerals in the world



Vocabulary Exercise

1) Match the following words with their meanings.

- | | | |
|------------------------|--------------------|--------------------|
| 1) desertification () | 2) drought () | 3) arid () |
| 4) estimate () | 5) productive () | 6) degradation () |
| 7) fragile () | 8) marginalize () | 9) continent () |
| 10) evaporate () | 11) vegetation () | 12) equator () |
| 13) alter () | 14) adapt () | 15) expire () |
| 16) evade () | 17) endure () | 18) dwell () |

- A) to become different; to make somebody/something different
- B) having little or no rain; very dry
- C) to change something in order to make it suitable for a new use or situation
- D) the process of becoming or making something a desert
- E) a long period of time when there is little or no rain
- F) 1. the process of something being damaged or made worse
2. a situation in which somebody has lost all self-respect and the respect of other people
- G) to live somewhere
- H) one of the large land masses of the earth such as Europe, Asia or Africa
- I) to form an idea of the cost, size, value etc. of something, but without calculating it exactly
- J) to disappear, especially by gradually becoming less and less
- K) an imaginary line around the earth at an equal distance from the North and South Poles
- L) to be no longer valid because the period of time for which it could be used has ended
- M) to escape from somebody/something or avoid meeting somebody
- N) to experience and deal with something that is painful or unpleasant, especially without complaining
- O) easily broken or damaged
- P) making goods or growing crops, especially in large quantities
- Q) to make somebody feel as if they are not important and cannot influence decisions or events; to put somebody in a position in which they have no power
- R) plants in general, especially the plants that are found in a particular area or environment

2) Read the following sentences and fill in the blanks from the words above.

- 1) He had () ed) so much I scarcely recognized him.
- 2) Be careful not to drop it; it's very () .
- 3) The pain was almost too great to () .

『真の日中理解のために』

学校名・名前・担当教科：兵庫県立宝塚西高等学校 吉井 吏（英語科）
実践教科：英語 ・ S H R
指導時数：3時間（英語 ）数回（ S H R ）
対象学年：高校1年生 対象人数：40人

< 教師海外研修を通して感じたこと >

世界第2位に上り詰めた中国の経済発展には、JICAの支援活動が大きな力になっている。物的にだけでなく人的にも多大な支援を中国は日本から受けているのだということ、中国の一般庶民は知っているのだろうか。その知識格差が大きいことを感じる。今回の訪問で私たちが出会った人々は必ずしも親日的ではないとしても、過去の日中間の歴史から学んだ日本の、中国に対する姿勢を理解している人たちであると思う。それでも、そんな人たちばかりではない。いまだに根強い日中間の諸問題。その原因の一つは、知識格差にあると思う。日本は中国を本当に理解していないし、中国も日本を本当に理解していないと思う。この教師海外研修はその知識のすれ違いの溝を埋めるきっかけであり、参加した私たちはそのきっかけを与える民間外交官であると自覚した。

教師海外研修に参加して私は、ココが変わった！

BEFORE

アジアに関する知識はある程度あっても、中国に関する知識は全くと言っていいほどない。

中国をマスコミが伝えるようなステレオタイプ式にしか考えられなかった。

漢字が苦手で、いまだに正しい書き順で書くことができない。

AFTER

中国に関する本を多く読むようになり、理解を深めるようになった。中国語学習を始めた。

政治的なものと庶民的なものは切り離して考えられるようになった。

表音文字としての漢字、そしてその成り立ちを意識するようになった。そしてこの文字を言語として使う国に住んでいることを誇りに思うようになった。

申し込み締め切り日まで参加するか迷ったが、結局、私の中では劇的ビフォーアフターになった。

授業の詳細

1. カリキュラム

(1) 実践の目的/背景

国際理解教育の実践に携わる教師として、これからはアジア理解とりわけ中国理解なしでは成り立たないと考え、中国文化を代表するものとしての言語特に文字に着目した。日本と中国は漢字文化圏であり、文字として漢字を共有している。表音文字である漢字が分かれば、ある程度理解は可能であることに注目し、教科書もある程度読解できると考えた。日中間ではとりわけ歴史認識の差が浮き彫りになることが多く、それが相互理解を難しくさせている。しかし中国の教科書を読むことでその違いを理解することができるはずだ。今回の研修では学校訪問の機会があることを利用し、中国の学生は日本に対しどう思っているかを生で捉え、自分が担任している学級と同じ内容でアンケートをとり、歴史認識の違いを含めた、いわゆる日中高校意識比較を主題として取り組んできた。

ステレオタイプという言葉があるが、私の担任学級生徒の中国に対する捉え方はまさにそのものだ。小・中学校で学んできた中国であり、中華料理の国である中国であり、マスコミによるイメージで踊らされてきた中国である。生徒のアンケートは予想通りそれを反映しているものばかりである。私の実践授業はそのステレオタイプを覆すことを目的にすべく計画した。わずか3回の授業実践だったが、その目的は達成されたように思った。後で具体的に触れるが、「中国をもっと理解しようと思った。」「中国語を学ぼうと思った。」「マイナスイメージを持った私たちは中国の人に対して申し訳なく思った。」など、生徒が学習後でもさらに自ら学んでいこうというきっかけを掴んだ反応はある意味私の予想外だったが、異文化に対して寛容的な姿勢があることの表れだと感じた。マスコミによる「植え付け」に左右されない、生徒の本当の中国についての知識欲を感じた。

(2) 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 中国の文字(簡体字)を知る	<ul style="list-style-type: none">・ 中国の概要 人口・面積・民族構成など・ 中国の行政区域 各省・各市・各自治区の位置を確認・ 中国で使われる文字(簡体字)を知る この簡体字は日本の漢字では何か?を 現地撮影写真をヒントにして推測させる。 <p>* 簡体字理解は、2 時限目の教科書読解につながるよう、中国の教科書(歴史)で用いられた漢字を指導する。</p>	<ul style="list-style-type: none">・ 教材プリント (学級だより) (当日使用プリント)・ 写真 (パワーポイント)

<p>2 時限目 中国の教科書（歴史）を読む</p>	<p>・中国の歴史教科書読解 1 時限目で学んだ簡体字を参考にして、中国の教科書（歴史）を読ませ、大体の意味を考え、日中相互の歴史観の違いをつかませる。（日本に関わっている内容を選び、班別にそのトピックを変える）</p> <p>* 3 時限目の橋渡しとなるように、特に歴史については、中国では日本をどのようにとらえているかを理解させる。</p>	<p>・中国の教科書 ・教材プリント（簡体字のまとめ）</p>
<p>3 時限目 教科書研究発表 & 感想 日中高校生の意識の違いを知る</p>	<p>・班別発表 各班ごとに与えられた項目について内容を発表し、あわせて感想を述べさせる。</p> <p>・アンケート結果発表 1 学期にクラスでとったアンケートのまとめと、中国でとったアンケートのまとめ</p> <p>・比較 9 つのジャンル別に日中高校生の相手国に対する意識の違いを認識させる。</p> <p>・第 2 次アンケート実施 日中の比較でわかったこと、学んだことを 9 つのジャンル別にアンケートを取る。</p> <p>* 歴史観の違いに真っ向から向き合い、日中相互理解への姿勢、問題解決への姿勢を養うきっかけとする。</p>	<p>・パワーポイント ・ワークシート</p>

2 . 授業の詳細

1 時限目 「中国の文字（簡体字）を知る」

目標

中国の概略を知り、イメージを抱かせる
簡体字を知り、2 時限目の教科書読解に繋げる

内容

中国の概要（地理データ、民族構成）
中国の行政区域（省・市・自治区）
簡体字を提示し、その文字を含んだ写真を見せ、その日本の漢字は何であることを推測させる。

使用した簡体字

时 读 场 产 车 桥 进 电 华 业 历 动 发 龙 议 机 灭

<ココがポイント>

これらの簡体字をクイズ形式であらかじめ学級だよりに掲載し、考えさせる機会を与えた。比較的簡単に推測できるものから並べた。第 2 時限の授業で取り扱うものだけを選んだ。



北京市内の道路案内板（橋）



北京市内の電器屋（電）

2 時限目 「中国の教科書を読む」

目標

教科書を読み、歴史認識の違いをつかませる。

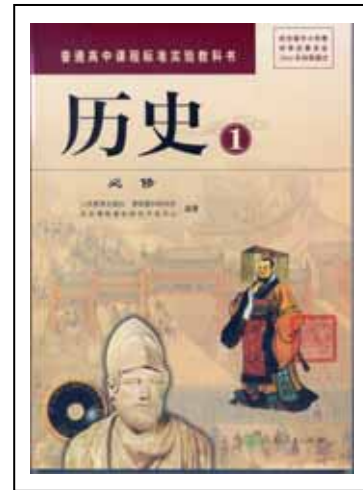
内容

新しい簡体字リストと読解のヒントを提示する。

5つの班に分け、各班が違う内容を読み、日本語でまとめる。

課題トピック

- 1 班 日中戦争（抗日战争 …全民族的抗战）
- 2 班 一国二制度の提案
（祖国統一大業 …一国两制構想的提出）
- 3 班 香港・マカオ返還
（祖国統一大業 …香港，澳門的回归）
- 4 班 日中国交正常化
（开创外交新局面 …中美，中日关系正常化）
- 5 班 日本の政治大国地位の追求
（世界多极化趋势的出现 …日本谋求政治大国地位）



中国の教科書（歴史）

終了時に研究レポートを提出。まだの班は宿題とし、翌週始めに提出させる。

<ココがポイント>

生徒はグループで活動するので、漢字や地歴が苦手な生徒をお互いにサポートでき、話し合いながら新しい考えを出し合うことができる。学習探求する雰囲気を作り出すことが大切。



教科書の内容（1班課題）



教科書の内容（5班課題）

提出日	日中比較	生徒
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	1班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	2班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	3班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	4班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	6班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	7班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	8班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	9班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	10班

提出日	日中比較	生徒
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班
2019年10月15日	日本の政治体制の比較	5班

生徒の研究レポート（左1班、右5班）

生徒の反応
 古典授業で漢文を学習している時期でもあり、電子辞書を駆使しながら真剣に漢字を一字一字読み砕いている姿が印象的だった。班によっては段落ごとに担当を分担し合っていた。

3 時限目 「教科書研究発表・日中高校生意識比較」

目標

- 発表を聞き、知識を共有する。
- 意識の違いに気付き、それを理解する。

内容

- 前回研究レポートの班別発表と感想
- アンケート（お互いの国に対する意識）結果発表
 - 9つのジャンル（国、人、食事、学校、スポーツ、文化、言葉、歴史、お互いの関わり）ごとに、まず、本校生徒の結果を提示し、次に中国生徒の結果を提示する。
- 第2次アンケート実施（アンケート比較の感想）
 - 9つのジャンル別に比較した感想
 - この授業全体を通じた感想（次ページに一部を掲載）

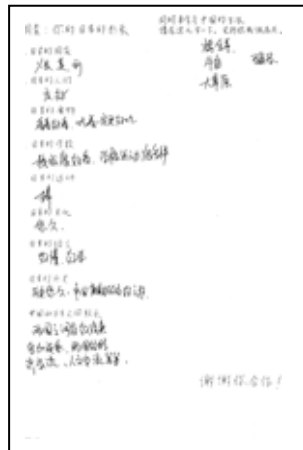
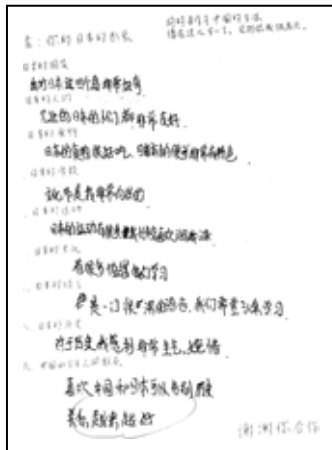


杭锦旗中学校



杭锦旗中学校の日本語クラスの様子

<ココがポイント>
 ジャンルごとに比較することにより、意識の違いが浮き彫りになる。教師が解説を加えることで、生徒はその違いを体感することになる。また結果発表の前に現地の学校や生徒の様子を写真で示すことにより、中国の学生を身近に感じさせることができる。



アンケートに回答中の杭錦旗中生

杭錦旗中生の回答済みアンケート（一部）

生徒の反応

予想と違う結果に驚いている様子だった。杭錦旗中生の回答項目の提示一つ一つに驚きの歓声、どよめきが上がった。本校生徒が新しい発見、新しい学びを感じた瞬間であったように思われた。第2次アンケート(事後アンケート)の結果にその学習の効果が表れ出ていた。

生徒の感想(第2次アンケートからの一部)

中国のことを勉強する機会なんて全然なかったのでとても良い機会だった。中国語を読んだり、和訳したりと普段できないことができて良かった。

今まで中国に対してあまりいい印象を持っていなかったけど、この授業を通じて少し考え方が変わった。戦争などの辛い歴史があったが、これからはもっとお互いのことを理解して関係を深めるべきだと思う。

中国は好きじゃなくて、あまり中国のこと知りたいとは思わなかったけど、中国のことを勉強しているうちに少しずつ興味が湧いてきて、もっと知りたいと思うこともありました。中国と日本は近い部分もあって、通じ合えることが多いかなと思った。また、自分でも調べてみたいと思った。

中国のことの授業を受けて中国のイメージが変わった。正直テレビとかのニュースの中国の悪い面ばかりを知っていたから、中国全体に悪いイメージを持ってしまっていた。だけど中国高校生の意見とかを聞くと、日本に対してとても良いイメージを持っていて、日本と良い関係を築いていきたいということが分かり、日本ももっと前向きに、ニュースとかだけで判断しないで中国のことについて理解していかなければいけないな、と思った。中国の教科書を読んで、大体の意味が分かったから、なんか改めて漢字が中国から伝わって来たんだなあ、と実感できた。中国のことについて授業を受けて中国のことも知れたし、良い経験になったと思うから良かった。

中国の人は日本に対して良いイメージをけっこう持っていてくれて、私たちが中国のことを少し変な国と思っていたことに申し訳ないと思った。私たちが大人になる頃にはもっと良い日中関係を築いていきたい。

所感

1時限の簡体字紹介では、現地で撮影した、その文字を含む写真だけでなく、それにまつわる写真も多く取り入れ、生徒の視覚に訴えてみた。しかし授業としては単調なものに終わってしまった。そこで2時限では生徒の活動を主体に置き、自ら探求し学ばせることで3時限の授業への橋渡しとした。英語の授業で行っている都合上、1時限と2時限の間が開いたが、この授業を心待ちにしている生徒も多く、異文化に対する知識欲の旺盛さを感じた。3時限は2時限の翌週に授業を入れ、生徒の授業へのモチベーションを下げることなく繋いでいくことができた。各班の教科書研究発表では全員静かに発表者に耳を傾けていた。

生徒も教師もまったく中国語の知識がないのに、中国の教科書を読ませようという試みは初めは無謀なことだと思ったが、漢字という文字を共有していることに着目し、折しも生徒が漢文を学習している時期であることが追い風となり、スムーズに活動が展開できたと思っている。そしてそういう意味において学びやすい外国語に触れることにより、生徒の外国語イコール英語という概念に風穴をあけることができたのではないかと、それが大きなきっかけになるのではないかと思ったりもした。

3. 成果と課題

2010年ほど中国に関するニュースが目立った年はない。とりわけこの2学期の4カ月は日中関係に大きな動きがあった。領土問題は国の主権に関わる非常にシビアな問題であり、私もマスコミが伝える中国に関する情報に振り回され、第1時限の授業を9月に終えた後どのように第2時限を展開させるべきか思案した。気がつけば12月、両国関係がある程度沈静化した時期に一気に第2、3時限の授業を行った。今思えばこの時期だからこそ生徒も教師も冷静に中国を見つめ、授業実践ができたのではないと思う。成果は本校生徒の第2次アンケートが示すとおりであり、隣国の本当の姿を知りたいことを映し出しているように思う。私が中国の高校生を対象に実施した調査結果が中国全人民を代表しているわけではないし、当然本校生徒もそのことは知っている。しかしこのような好意的な眼差しを送っている人も中国には多くいるのだということを知らせる役割を私たちは担っているという意味で、大きな成果をあげることができたと思っている。中国は2010年の教師海外研修の目的地にふさわしい場所だったと思う。

さて今後の課題としては、この貴重な研修体験を今回の授業実践だけでなく、いろいろな授業の場で伝え続けていかなければならないが、情報共有を教員間ですることも必要かと思う。また小学校、中学校の先生方がどのように中国をこの研修で見つめ、どのように授業実践をされてきたかを高校の教師が知ること必要だと思う。だから、この冊子が出来上がれば多くの先生方にこの授業実践集を読んで活用して頂くのも課題の一つである。生徒のアンケートにもあったが、彼らが大人になるまでに、自らの経験を通じた正しい情報を生徒に伝え、真の日中理解に取り組み、良好な日中関係を築ける人材を養成するのが私たち教師の役目だと思う。

参考資料

・参考文献

- 『そうだったのか！中国』池上彰（集英社）
- 『HSK 漢字学習字典』胡星（北京語言大学出版社）
- 『旅行で使える！伝わる中国語』田口善久（NHK 出版）

・教科書読解補助プリント（第2時限で使用）

中国理解② 中国の教科書を読んでみよう 12月15日（水）
 ・繁体字と日本語の漢字

陆	陸	开	開	胜	勝
为	為	权	權	军	軍
实	實	伟	偉	关	関
书	書	队	隊	归	帰
构	構	战	戰	础	礎
亿	億	敌	敵	广	広
义	義	转	転	击	撃
环	環	还	還	过	過

-(人の名前)
 邓小平 鄧小平 (とうしょうへい) 【中国】
 毛泽东 毛沢東 (もうたくとう) 【中国】
 周恩来 周恩来 (しゅうおんらい) 【中国】
 尼克松 ニクソン大統領 【米国】
 基辛格 キッシンジャー国務長官 【米国】
 撒切尔 撒ッチャー首相 【英国】
 田中角荣 田中角栄首相 【日本】

-(地名)
 华北 華北 华中 東北 華北 華南 華中 東北 (中国の地域名)
 卢沟桥 盧溝橋 (ろこうきょう) 北京市内にある橋の名前
 北平 北京の旧称 天津 天津 (テンシン)
 平津 北平・天津区域 上海 上海 (シャンハイ)
 广州 廣州 (こうしゅう) 武汉 武漢 (ぶかん)
 香港 香港 (ホンコン) 澳门 マカオ
 台湾 台湾 (たいわん) 越南 ベトナム
 西方国家 西側諸国 美国 アメリカ
 葡 ポルトガル

-(その他、読解に必要な中国語の語句)
 后 ～の後 了 ～した。
 的 ～の 个 一個
 关于 ～に関して 这个 この一
 可以 ～できる。 应该 ～しなければならぬ
 从 ～より、～から 目前 直前に
 和 ～と 还 まだ
 由于 ～のおかげで 刚刚 ちょうど
 被 ～された。 所谓 いわゆる
 没有 ～はない。

・パワーポイントシート
 （第3時限で使用したものの一部）

お互いの人 イメージ比較

日本 → 中国	中国 → 日本
<ul style="list-style-type: none"> ○ 感情が豊か。 ○ マナーが悪い。 ○ 賑やかな人が多い。 ○ 自己中が多い。 ○ 気が荒い。 ○ 何事にも熱い。 ○ 短気 ○ 好奇心が旺盛 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 親しみやすい。 ○ 礼儀を重んじる。 ○ 真面目である。 ○ まとまりがある。 ○ 愉快だ。 ○ 暖かみがある。 ○ ハイ 퀄리티。

お互いの歴史 イメージ比較

日本 → 中国	中国 → 日本
<ul style="list-style-type: none"> ○ 三国志。 ○ 強い人物がたくさんいる。 ○ 古い歴史がある。 ○ 日本との交流。 ○ 韓国とごっちゃになっている。 ○ 隣国との戦争が多くあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 明治維新。 ○ 私たちは日本の歴史を良く知っているから、日中間の歴史もよく知って欲しい。 ○ 中国と密接な関係がある。 ○ 歴史を学びつつ自己を高めていこう。

・杭錦旗中生を対象に行ったアンケート用紙

調査：你的日本形象 同时学习中国的写法。请在这儿写一下。见到你我很高兴。

- 一、日本的服装
- 二、日本的人们
- 三、日本的食物
- 四、日本的学校
- 五、日本的运动
- 六、日本的文化
- 七、日本的语言
- 八、日本的历史
- 九、中国和日本之间联系

谢谢你合作!

日本と中国との関わり

中国 → 日本

- 隣国であり友好国。
- もっと多くの関係を。
- 中国と日本には辛い歴史があまりにも多すぎた。
- 両国がともに良い関係作りに協力する。
- 中国と日本の辛い過去の歴史に別れを告げ、よりよい関係を築きたい。
- 両国が経済交流や人的交流を深め、さらに友好関係を築かなければならない。
- 中日友好往来共同发展，共同繁荣。

「中国人と日本人のものの見方の違いについて」

兵庫県教育委員会事務局人権教育課主任指導主事 永峰 恵介

共同研究・共同授業協力者等

- 1 学校名・名前 : 伊丹市立鴻池小学校 投石悠一
実践教科 : 総合的な学習の時間
指導時数 : 1時間(10/14)
対象学年 : 小学4年生 対象人数: 28人
- 2 学校名・名前・担当教科 : 県立夢野台高等学校 阿部恵子(家庭科)
実践教科2 : 特別活動
指導時数 : 1時間(2/5)
対象学年 : 高校2年生 対象人数: 240人
- 3 学校名・名前・担当教科 : 甲南高等学校 澤武潤子(英語科)
実践教科3 : 「時事英語」
指導時数 : 1時間(12/20)
対象学年 : 高校3年生 対象人数: 8人

教師海外研修に参加して私は、ココが変わった！

BEFORE

20年前の見方や感じ方

約20年前に中国に行った。行き先は、北京と上海。北京は、独特のにおいがして、香港と共通のにおいであった。料理も北京独特の味がしていた。北京の空港は、少し古い印象で、国内線で移動するのに飛行機の整備不良で12時間ほど遅れたことが印象に残っている。

観光目的で行ったこともあり現地の人とのコミュニケーションは、ほとんどなかった。万里の長城や故宮などの中国文化にはふれたが、「中国」との交流がなかったことが思い出された。

AFTER

今回の研修参加後の見方や感じ方

今回の教師海外研修でも、まずは、北京に行った。北京首都国際空港は、最新の空港に生まれ変わっており、電気自動車が音もなく空港内のフロアを走っていたり、上海万博の影響もあってか、国際性豊かな人々がひしめいていたり、かなり印象が変わっていた。

今回は、北京だけでなく、内モンゴルや天津にも行った。訪問先では、目的意識をもち、たくさんの中国の方々とのコミュニケーションができたことで、観光目的とは違い、「中国」と交流ができたように思う。

< 教師海外研修を通して感じたこと >

外国人から「日本人は旅行が好きですか？」と尋ねられたら、あなたは、どのように答えるだろうか。教師海外研修に参加する前に、神戸在住の中国人留学生 R さんに「中国人は旅行が好きですか？」と尋ねた。すると「わかりません。」との答えであった。

その時、私はとてもうれしく思った。そして、今回の研修でも、あえて何人かの中国人に「中国人は旅行が好きですか？」と質問してみた。その答えには、次のようなものがあった。

「知りません。」「わかりません。」「答えられません。」「その質問は答えにくいです。」…中国人は、中国のことを教えてくれないのだろうか。それとも会話が苦手なのだろうか。

ほかにもこのような答えがあった。

「私は、中国人を代表しているわけではないのでわからない。」「中国人全体のことはわからないけれど、私自身は旅行が好きです。」これが、私がうれしくなった理由であった。

私はこれまで、日本人を代表しているわけでもない、ある日本人が「日本人は、みんな旅行が好きだから、時間があれば旅行に行きたがるのですよ。」などといっているのを聞いて、どこか違和感を覚えていた。個人の基準で“みんな”のことまで答えているような違和感を感じていたのだ。

また、中国リハビリテーション研究センターを訪れた際に、渡り廊下にたくさんの日本人の写真が飾られていた。このセンターは、日本から資金と技術の援助をうけて建設され、今も多くの専門の人材を輩出し、リハビリテーションを必要とする方々に役立っているとのことである。この写真を飾っている意味は「水を飲むときは、井戸を掘ってくれた人のことを忘れるな」ということらしい。

私自身、忘れかけていた感覚を思い出し、はっとした瞬間であった。

このほかにも、紅丹丹での視覚障害者音声情報提供技術指導事業の見学や庫布齊での、360°見渡す限り続く庫布齊砂漠から吹く風、そして錫尼鎮布哈岱村での村のみなさんのあたたかなもてなしなど、心に残るたくさんの経験をしたことを、私の今後の教育実践に活かしたいと思っている。

1. カリキュラム等

(1) 実践の目的/背景

ア 人権の視点

近年、日本においては、国際化や情報化、少子高齢化などが急速に進み社会状況が大きく変化する中で、価値観の多様化や個人の権利意識の高まり、生命を軽んじる風潮などを背景に人権にかかわる様々な課題が生じている。

また、日本語指導が必要な外国人児童生徒の公立学校への就学が増加する中、外国人児童生徒の自己実現を支援するとともに、すべての児童生徒が互いの「違い」を「違い」として認め合い、多様な価値観を受容しながら、共に生きようとする意欲や態度をはぐくむ必要があり、現在、その取組が行われている。

しかしながら、中国における人権に関する日本国内での報道によると、自由に発言がで

きない、特にインターネット上でさえも言論に検閲があるなど国民の人権が保障されているとは言にくい状況だと感じることもある。

教育現場ではどのような状況なのか、開発教育を実施するうえで支障はないのだろうか、と考えながら教師海外研修に参加したのだが、結論から言うと、明確な答えは見つからなかった。

そこで、実際に私自身が見たこと、感じたこと、特に中国のよいところを伝えていくことをテーマに共同授業をすることとした。

イ 共同授業

現在、教育行政で勤務している私は、伊丹市立鴻池小学校の投石悠一教諭、県立夢野台高等学校の阿部恵子教諭、甲南高等学校の澤武潤子教諭と共同研究をさせていただくこととなり、それぞれの学級で1時間の授業を担当した。私が担当したどの授業もねらいや基本的な内容は共通したものなので、ここでは主に、県立夢野台高等学校での共同研究について述べていく。

(参考) 永峰担当授業の共通指導内容

- 1 県下の日本語指導が必要な外国人児童生徒について
- 2 人権の視点から見た教師海外研修(中華人民共和国)

(1) 砂漠化についての現状と植林等

中国では、かつて森林であったところが、どんどん砂漠化していた。このままでは、砂漠がさらに広がっていくので、地球全体の危機と言える。

それを防ぐため植林をして砂漠化を防いでいる現場を見てきた。

なぜ自分がしなければならないのか、なぜ中国がしなければならないのか、ではなく、「誰かが防がなければ」と、10年ほど前から、こつこつ植林をはじめ、それをライフワークとしている中国人がいた。樹木は確実に育っており、自分の命がある限り植林を続ける覚悟だという。彼は、日本が、そのための資金や技術を援助していることを、決して忘れてはいなかった。いつも感謝しているとのことである。

(2) 言葉にあらわれる感覚

外国人と話をしたことがあるかもしれないが、外国人から「日本人は、おにぎりが好きですか?」と尋ねられたら、どのように答えるだろうか。

中国人に、「中国人は餃子が好きですか?」と尋ねると、彼らは、「私は中国人の代表ではないので、中国人(全体)のことはわかりません。」と答える人が多かった。

- 3 よりよい子ども多文化共生社会の創造のために

(2) 授業の構成等(県立夢野台高等学校 阿部恵子教諭)

ア 教材観

人権学習として身近な人権課題を取り扱うとき、「同和問題」、「外国人」、「いじめ」等々が扱われることが多いが、生徒の中には、人権 LHR は「余計な発言は避けたい時間」という認識があるとみてとれることがある。個々の人権課題を解決するための意識の向上は図れても、根本的な「『人権』とは何か?」という問いかけには、明瞭に答えられにくい。

今回の人権学習は、個別の人権課題に対しどのような取組が必要かという観点と、人

権一般の普遍的感覚な視点からの取組をはかる観点の2つの柱から成り立つ総合学習である。

そして、人権感覚の育成を図るための題材の一つとして「開発教育」を手段とすることは有効であると考え。「開発教育」の視点から人権を考えることは世界の人間について考えることにつながるからである。

イ 生徒観

NIE 活動を通じて得た中国に対する本校生徒のイメージは、2002年の冷凍ホウレンソウ農薬検出事件に端を発し、2008年の冷凍ギョウザ事件、乳製品のメラミン混入事件等の影響もあり、これまで総じて良いものではなかった。昨今の外交上の諸問題の報道を受け、さらに否定的・攻撃的な見方をする生徒が増えた。

本校当該学年には、中国と関わりの深い家族構成がある者が数名いる。子どもたちの間で交わされる言葉には注意が払われているが、それでも、ひやりとする発言が飛び出す瞬間もあり、中国に対する差別的な意識が彼らの中にあるように感じる。

しかし一方で、中国と関わりの深い生徒が話す美しい中国語に感嘆の声をあげ、非常に純粋な興味から様々な問いかけをする生徒の中に「違いを受容できる」素直な人権感覚もある。

ウ 指導観

自分がどこに所属するか（アイデンティティー）を考えることは、自分が所属しない領域との違いを区別する知的分別から始まる。区別の際に偏った情報が抽入されると区別は差別へと変質する。つまり、民族意識や民族差別感情は先天的なものではなく「後知識の産物」ということとなる。従って、高校生という知的発達の著しいこの時期にこそ、様々な切り口から考えて人権感覚を研ぎ澄ませることが必要と考える。

人権一般の普遍的感覚の涵養を図る学習では、個別の人権課題について考える学習とは方法を違え、生徒の発言が活発に行きかう授業の方が効果的であると考え。そして多様なものとのとらえ方が存在することを体験させる。授業の中で偏った情報が入り込まないようにするために、教材プリントの題材として生徒を中心に据えた教材プリントの題材や紙面作りには十分に注意を払いたい。

また、学習が発展していく中で特定の民族・国を扱う場合は、単に「違い」を認識し相互に共通する点を理解するだけでなく、相互の歴史・伝統、社会背景などを踏まえた多元的な価値観を尊重しあう態度を育成することをめざしたい。

エ 授業計画

(ア) 1時間目(11月18日(木))

日常生活の中の思考回路と人権について考える(担当:阿部)

思いこみ ~人がもっている枠組みについて考える~

(イ) 2時間目(11月25日(木))

なぜ、中国についての学習が必要なのかを知る(担当:永峰)

- ・ 県下の日本語指導が必要な外国人児童生徒について
- ・ 人権の視点から見た教師海外研修(中華人民共和国)
- ・ よりよい子ども多文化共生社会の創造のために

(ウ) 3～5時間目(12月15日～17日)

中国を理解し、日本について改めて考える(担当:阿部)

「思いこみや決めつけ」について学習する

(家庭科・ロングホームルーム・総合的な学習の時間の中での取組)

- ・ さまざまな場面における「思いこみや決めつけ」
- ・ 相手の目に映る「自分」が本当の「自分」であるかどうか、友だちの言葉に翻弄されていないかのふりかえり
- ・ 「思いこみや決めつけ」が原因で起こる誤解や争いごとの原因

生徒の感想(永峰担当授業)

- ・ 日本からの援助により、中国でも義足が作られているのだと知った。
- ・ 想像していた中国と違う一面を知ることができて良かった。
- ・ 中国に対してあまりよい印象がなかったけれど、少し中国に対する印象が変わった。
- ・ 意識しないうちに、日本の方が中国より進んでいるという考えをもっているのだと気づいた。
- ・ お互いに理解し合う、その気持ちがまず大切だと思った。
- ・ 日本で当たり前なことであっても、日本に来た外国人に強制しないことが大事だと思った。
- ・ 自分の意見をしっかり伝えること、人と分かり合おうとする気持ちが大切だと思った。
- ・ “言葉”を理解する力と“心”を理解する力を、ぜひ身につけたいと思った。
- ・ 一人一人違うことを意識すればうまく外国の人や、同じ日本人とも暮らしていけると思った。

所感 (共同研究・共同授業全体をとおして)

伊丹市立鴻池小学校

好奇心旺盛な小学生に、同じものを見て、同じ経験をしても感じ方やとらえ方が同じとは限らなかったことを話すと、きらきらと目を輝かせ、興味津々の様子だった。児童と投石教諭との人間関係が、児童の興味を倍増させていると感じた10/14時間目の授業だった。

県立夢野台高等学校

知的好奇心が旺盛な高校生に、講義形式で授業をしたのだが、240人と人数が多かったこともあり、同じものを見て、同じ経験をしても感じ方やとらえ方が同じとは限らなかったことが伝えられたかどうかと心配になった授業であった。私が担当した2/5時間目以降に阿部教諭が「思いこみや決めつけ」の授業で、うまく補完してくださった。

甲南高等学校

12/20時間目に、8人の生徒に時事英語として、同じものを見て、同じ経験をしても感じ方やとらえ方が同じとは限らなかったことを英語で伝える授業は、私には過酷な時間であった。高校生の英語力と澤武教諭の11時間目までの授業によって、うまく生徒の興味・関心を引き出されていると感じた。

2. 成果と課題(共同研究・共同授業全体をとおして)

中国に対する「思いこみや決めつけ」に気づかせ、お互いに理解し合うことの大切さを伝えることができた。

そのために、人と分かり合おうとする気持ちのもと、自分の意見をしっかり伝えることや“言葉”を理解する力と“心”を理解する力を身につけようとする意欲をもたせることができた。

中国での研修や体験から、同じ経験をしていても、感じ方やとらえ方は人によって同じとは限らないことに気づかせ、児童生徒が互いの「違い」を「違い」として認め合い、多様な価値観を受容しながら、共に生きようとする意欲や態度をはぐくむことができた。

今回指導したことが、日常生活の中で、自分の人権を守り、他者の人権を守るための実践行動につながるよう人権感覚として定着させていく必要がある。

そのためには、学校の教育活動全体を通じて、人権に関する知的側面、価値的・態度的側面、技能的側面を総合的にはぐくむ取り組みを継続していくことが大切である。

参考:授業で使ったプレゼンテーションなど



庫布齊沙漠



内蒙古自治区植林植草事業



中国リハビリテーション研究センター



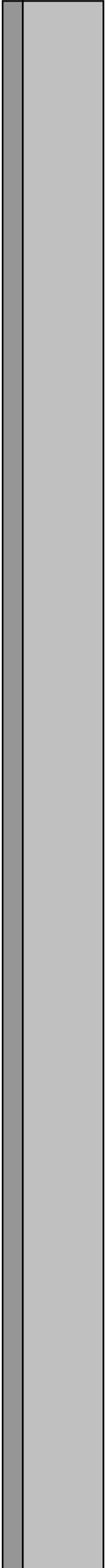
内蒙古博物館



県立夢野台高等学校での授業の様子



県立夢野台高等学校での授業の様子



【第4部】 成果と課題

4-1 海外研修を終えて

教師海外研修を終えた参加者8人に対して行ったアンケートから、感想を抜粋した。海外研修と事前研修・事後研修を合わせてもわずか15日程度であったが、授業実践集やここに挙げた感想からもわかるように、各自大きな変化が見られたと言える。この教員自身の変化が児童・生徒に還元され、児童・生徒も変化し、成長へと繋がっていくことを期待したい。

(1) 教師海外研修に参加してよかったこと

【研修での経験について】

- ・一つのことに對して、様々な視点から違った意見を聞くことができた。
- ・帰ってきて教壇に立ったときに、子どもたちにしてやれる話が増えたことがよかった。
- ・現地に住む人々の生の声が聞けたこと。国が違っていても人と人がつながり合うことはとても温かく、人間みんな一緒だということを感じられたことが一番良かった。
- ・これまで実際に足を運ぶことがなかったODAの現場を一通り見てまわることができ、議論に参加できるだけの材料を頂いたことが本当に有り難いことだと思っています。
- ・観光では行けないところに行け、現地の人々と交流ができる。
- ・行き先にもよるのですが、今回は中国ということで、開発途上国の面もあるし、先進国の面もある世界の大国を初めて訪問させて頂けたことが私にとっては大きいです。単なる観光旅行では決して得ることのできないものを得ることができるのが、この研修の醍醐味だと思います。
- ・観光目的ではない海外での体験ができたこと。

【訪問先や研修で出会った人について】

- ・校種、年齢等が異なる人たちといろいろな話ができ、とても有意義であった。
- ・いろんな立場の参加者や、行き先で、人に出会えたことがよかった。
- ・校種が違う人や、JICAスタッフとも全く違う視点でものを見ていたり、感じたりしていた。その感じ方の違う話を聞くことができたことは面白かった。また、違う校種の人たちと知り合うことができたのもよかった。今後もこの関係を大切にしていきたい。
- ・観光では絶対会えない人たちに出会えたこと。特に集落での交流は貴重な体験になった。青年海外協力隊員の実際の活動に触れ合えたこと。
- ・学校種の異なる先生方と共に過ごして、新たな知見を頂いたように思います。研修自体、内容の深いものでしたが、もしこれを一人で見て回るのであれば授業実践まで出来ただろうかと思ってしまう。
- ・普段交流することのない他校の先生達と交流ができる。
- ・一緒に参加した先生方と知り合いになれたこと。
- ・海外研修から戻ったあとにも、交流が続くこと。

【参加者自身の変化について】

- ・授業実践のためだけでなく、自分の視野を広げ、価値観や生き方を見つめ直す良い機会となったと思う。
- ・日本で知る情報と現地で見える情報は多少の差異があることに気づくことができる。
- ・自分が抱いていた中国の印象を変えたものも変えなかったものもあります。2学期での授業実践でこの研修の満足感を再び味わうことができました。

(2) 次年度以降の参加者へのアドバイス

出発まで

【事前研修について】

- ・研修体験者との意見交換は、出発までにじっくりしておくといいと思います。準備物や見てくる視点が定まります。
- ・その国について、よく知る。ビデオや本などを見たり、読んだりしておくといい。
- ・おそらく誰もが忙しい中、参加することとなるでしょうが、研修に関して事前に調べることで、知っておくこと等は、なるべくたくさんリサーチしておきましょう。

【持ち物について】

- ・自分の国、町、学校などを紹介できるような写真やビデオが用意できるとよい。
- ・手土産（数や内容、渡し方など）について、もっとみんなで打ち合わせて行くべきだった。必要がないと言われていたのだが・・・後半、渡したい方に何も渡せなくて残念だった。
- ・大丈夫と思っていても、ポカリスエットとカロリーメイトは買っておく。
- ・名刺を準備していたが、現地の言葉でも書いておけばよかった。交流会もたくさんあるので、歌とかの出し物を用意しておくとう助かる。
- ・スーツケースは、ハードタイプではなく布製のものが良い。教材を購入したり、書籍を持っていくと20kgはあっという間に越えてしまう。ホテルの部屋の体重計にかばんをのせて超えた分を手荷物にしました。（スーツケースだけで7kgはある）。ちなみに体重も増えていました。
- ・出発直前になって、デジカメが調子悪くなりました。記録用の機材は、十分に点検しておくべきでした。
- ・写真撮影は目的をもって行ったほうがいいし、性能の良いカメラを持っていくべきでしょう。私の場合、ほとんど画像がぼけていて、被写体もつまらないものばかりだったので使えそうなものはありませんでした。授業実践で用いた写真はほとんど他の先生方から拝借したものでした。新しいデジカメを買うべきだった。そしてカメラテクを磨くべきだった。後悔しています。

【授業実践について】

- ・行ってみないと分からないことが多いのだが、ある程度、どんな授業をしたいのかを考えておくべきだと思う。
- ・行き先に対する参加者自身や児童生徒のイメージを具体的にしておく、現地へ行った際にイメージとのギャップが生じて発見につながりやすいと感じました。

【その他】

- ・生徒との三者面談のある時期に、行程を予習しながら職場に提出する9日分の研修願を書くのは大変でした。事前研修の段階からこまめに予習しておくとういと思います。
- ・現地の言葉を徹底的にマスターしましょう。その言葉が通じる喜びと、そこから得る情報は非常に貴重であるから。
- ・しっかりリサーチして、研修以外での楽しみを準備しておきましょう。

海外研修中

【研修中の記録について】

- ・思いついたことはすぐに書き留めておく。遠慮せずに質問するほうがよい。
- ・どんな授業をしたいのかを心に浮かべながら、写真をとったり資料集めをしたりするとよい。
- ・できることはその日のうちに仕上げておく。所感はその日の夜に書いておくとう便利。
- ・ボイスレコーダーのお蔭で、帰国後、職場に提出する研修報告書の作成が楽になりました。
- ・青年海外協力隊員の話はビデオに録画しておくとう児童・生徒にもあとで見せることができるのでよいと思う。写真は活用にイメージがわくが、ビデオの活用は事前にどの場面で授業に使えるか実際に行くまで考えられなかった。最近はスカイプなども隊員の方は使われているので、事後の授業の中で出演していただけるように依頼しておくのもよいと思う。
- ・とりあえずメモを取る。できるだけ訪問先の所感はその日のうちに書いておく。
- ・ICレコーダーが役に立ちました。メモだけでは限界があります。メモを取るのが面倒な人は必携です。また授業実践でパワーポイントを用いることがあれば、そこに音声データとして貼り付けることもできます。スグレものです。
- ・毎日、しっかりメモをとったり、写真を撮っておきましょう。日本の友人や家族、職場の仲間手紙を書きましょう。自分にはがきを書いておくのもよいでしょう。
- ・出来事は、すぐに忘れがちです。思い出すヒントになることをたくさん作っておきましょう。

【体調管理について】

- ・期間も長く、プログラムもハードなので、とにかく体力勝負。団体行動だからと無理はしないことが大切だと思う。
- ・旅費が税金から拠出されるのだからと考えると、とても肩に力が入ってしまうものですが、気負い過ぎるのも良くないと思いました。私は旅の始めの頃、周囲にご心配をかけたようでちょっと反省しています。
- ・油脂の多い料理が続きましたので、ビタミンB2の錠剤が役に立ちました。
- ・体力温存もよいのですが、懇親を深めることも大切。バランスよく研修しましょう。
- ・無理をしないこと。団体行動優先だけでなく、自分の休息をバランスよくとりましょう。

【その他】

- ・いつもJICAスタッフに頼りすぎてしまうので、一度、中日くらいに教師だけで話し合う機会を持つ。(ご飯のときなど)

海外研修後

【記録・記憶の整理について】

- ・帰国後、なるべく早いうちに記録をまとめておく。
- ・実践報告書の記述は、出来るだけ早くからこまめに進めた方がいいと思います。私は1週間かかりました。
- ・帰国後すぐに提出する書類は作成してしまう。そうじゃないと忘れてしまう。
- ・日本に帰ってから、手紙を書ける人に出会いましょう。
- ・研修先での出来事を思い出すヒントを時々出してください。
- ・報告書は実践後すぐに書いてしまった方がいい。

【参加者ネットワークについて】

- ・一緒に行った仲間とたくさん話し、意見交換をする。同じ体験をしていても、様々な視点から物事を見ているので、「目からうろこ」なことがたくさん発見できるはずです。

【その他】

- ・体調を崩してしばらく、ダラダラとした生活を送ってしまった。研修後しばらくはゆったりしたスケジュールにしておくといいように思う。
- ・相手国にもプライドがあるということを決して忘れないこと。JICAのこれまでの支援が評価されているのであって、私たちはそれを見学に来た存在に過ぎないとぐらいしておく。
- ・早く体調を元にもどすこと。体調が戻らなければ何もできません。
- ・休むときは、しっかり休みましょう。

授業実践について

【授業実践の時期について】

- ・2学期は思った以上に忙しいので、なるべく早いうちに授業を始めた方がいい。
(運動会、音楽会...と授業を後回しにしていたら、時間が足りなく、詰め込んでしまう形になってしまいました。
- ・応募の段階から授業案は用意していましたが、結局全然違うものになりました。慣れた教科指導と違い、授業を始めてみて内容や方法に手直しを加えていくこともあると思うので、2学期の正味3ヶ月という限られた時間の中では少々厳しいものもありました。
- ・夏休み中に授業実践の案ができていないと、実践はむずかしいと思う。

【授業実践の内容について】

- ・何を伝えたいのかをしばってから、持ち帰った資料をどう使うかを考えた方がいいと思う。現地のイメージを言葉で児童生徒に伝えることが難しかった。写真や映像も補助的な役目しかなかった。伝え方については工夫が必要と感じました。
- ・当初は国際交流の授業を考えていたが、やはりお互いにメリットになるものにしないといけない。相手に相当の負担をかけてしまうものはよくないと感じた。相手の希望に沿って交流を行うのはとてもよいことで、特に日本語を学習している生徒たちとの交流は、日本の生徒にも味付け

しだいでメリットがあると思う。

- ・日本語での展開ができたならもっと深い議論ができる。(英語教師)
- ・訪問先が決まったら、自分の興味関心のあることを一つ絞って、事前に可能な限り勉強しておくといよい。
- ・テーマは1つに絞り込まず、複数考えておいたほうがいいでしょう。研修中も常に授業実践を念頭に置かなければなりません。そうすれば違った視点で物事を捉えることができると思います。
- ・教育委員会等授業ができない所属の方は、共同研究・共同授業等工夫をして実践をするとよいと思います。

4-2 同行者の視点からの一言

藤善 奈美【JICA兵庫 国際協力推進員】

今年度の派遣国である中華人民共和国は日本にとって身近な存在であり、兵庫県内でも中国国籍の住民は外国人登録者としては2番目に多い。中国にルーツを持つ児童・生徒が在籍する学校も数多く存在している。しかし一方では、メディアの報道によるイメージばかりが先行するという現実も多々見受けられる。参加教員たちは、そのような状況が子どもたちの間にも見られることを認識しており、メディアの影響に囚われず、実際の中国の様子を自ら感じ、伝えたいという目的意識を持っていた。その目的意識のもと、文化・生活習慣や経済成長の様子、環境など、自らが関心を持つテーマに沿って積極的に質問し、情報や教材を収集しようとする姿勢は、それまでの開発教育の実践経験の有無にかかわらず、非常に頼もしく感じられた。

帰国後の授業実践において、やはり一番問題となるのが授業時間の確保であろう。主催側も管理職者に対し事前に挨拶を行うなど工夫はしているが、やはり応募時点から、帰国後の授業実践に関して管理職者及び同僚の協力を得られるよう心がけることが何よりも重要であると感じる。しかしそのような中でも、所属校やクラスの個性に合わせた授業展開となるよう努力して、自らが体験した等身大の中国の姿を伝えていただけたことは喜ばしいことである。

海外研修の成果を消化するための十分な時間がとれなかったり、限られた授業時間数の中で実践に臨まなければならないなど、充分納得のいく実践内容であったとは言い難いかもしれない。しかし、研修の成果を生徒たちに還元する機会は、今年度だけにとどまらない。2009年度から、教師海外研修の過去参加者による自主勉強会やメーリングリストによる情報交換が活発に行われており、授業実践継続への刺激となる場には事欠かない。学校で学ぶ子どもたちにとって、一番身近な存在である「先生」が語る海外の話は、きっと身近に感じられることだろう。それは、このグローバル化する現代社会において、子どもたちが地球規模の視野を持つための重要なきっかけとなる。この経験を出発点として、1人でも多くの参加者が、開発教育の授業をさらに深化・発展させてくれることを期待している。

山田 麻紀【JICA兵庫 プログラム・コーディネーター（開発教育支援担当）】

JICAが毎年実施する教師海外研修。それは、単に知識として開発途上国の現状やその国が抱える問題を知ることにと留まらず、この海外研修の中で参加者たちが気づき、感じたことを教材化し、児童・生徒たちに伝え、その気づきを自分たちの問題として捉え、一地球市民としてなんらかの行動を起こす姿勢を養うための研修です。

しかし、「国際理解教育」という言葉はよく耳にするが、「開発教育」という言葉はあまり聞きなれない、というのが現状ではないでしょうか。そんな中、参加者たちは、3日間に及ぶ事前研修で行った開発教育ワークショップなどに参加し、少しずつ「気づき」について考え、そして感じ始めていったのだと思います。また、参加者たちの授業案を共有し、さらに良い方法はないかとアイデアを出し合いました。小学校・中学校・高等学校・教育委員会と参加者たちの所属先は様々ですが、生徒たちに上手く伝わるかどうかイメージを膨らませ、帰国後、授業を実践しました。

9日間の海外研修では、JICAの行う国際協力事業の現場を視察し、活発に意見交換をしました。特に印象的だったのは、参加者たちが、「いかにこのプロジェクトを成功させ、継続させていくのか」ということに関心を持ち、説明者に意見を求め、そこに参加する現地の人たちの気持ちに熱心に耳を傾けていることでした。また、メディアによる報道により、同国に対する印象が偏りがちな中、同国の人々と積極的に交流し、その中で、彼らの熱心さや優しさに触れ、報道に振り回されず、もっと勉強し、色々顔を持つ同国についてもっと知りたいと思ったようです。

開発教育を実践する場は、総合学習の時間のみではありません。私は、工夫次第で色々な場で「気づき」の機会を提供できるものだと考えています。今年度の授業実践は終わりましたが、来年度以降も継続的に、気づき、考え、行動を起こすための機会を、児童・生徒、同僚教員、そして地域の人たちに与え続けて欲しいと強く願います。また、開発教育支援担当者として、今後もより多くの人々に地球市民として考える機会を提供し、開発教育に熱心に取組む先生方の力になれるよう努力していきたいと思います。

JICA (Japan International Cooperation Agency) とは

独立行政法人国際協力機構 (JICA) は、開発途上地域等の経済及び社会の発展に寄与し、国際協力の推進に資することを目的として設立された独立行政法人です。政府開発援助 (ODA) として、技術協力 (技術研修員の受入れ、専門家の派遣、機材の供与、開発調査など)、有償資金協力、無償資金協力、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアなどの派遣、災害緊急援助などを実施しています。

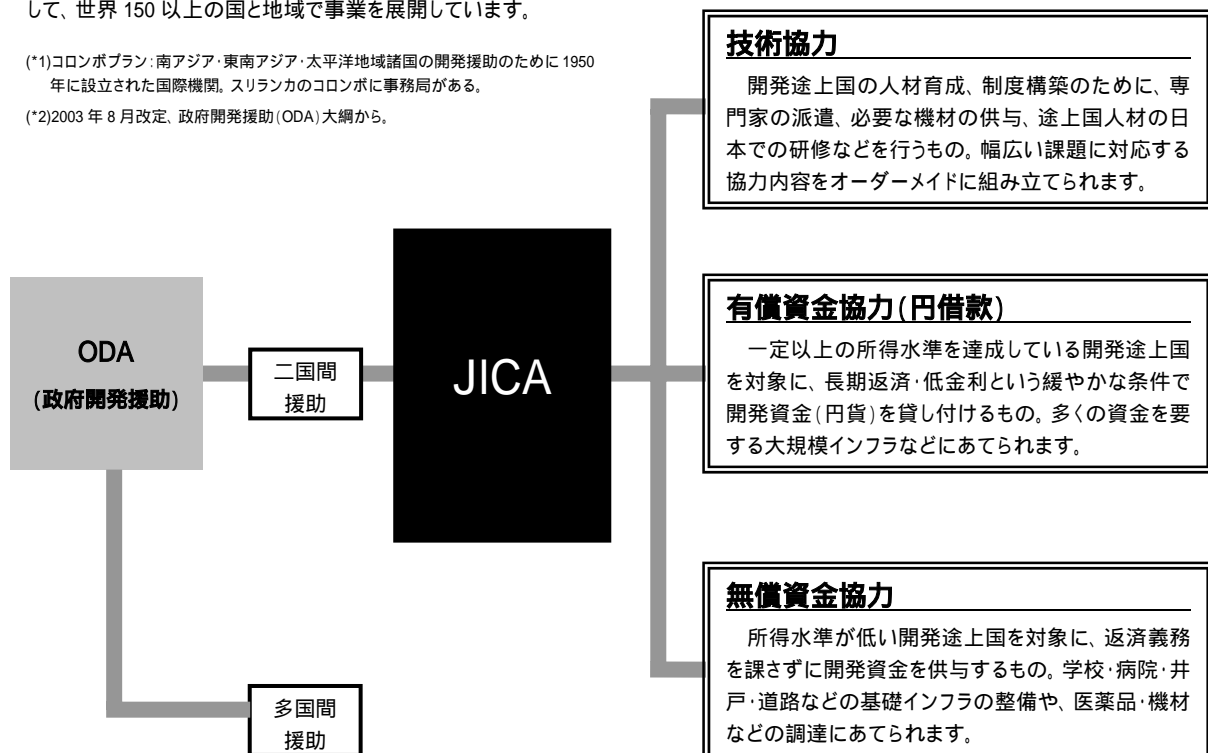
ODA と JICA

日本は、1954 年にコロンボプラン(*1)に加盟して以来、「国際社会の平和と発展に貢献し、これを通じて我が国の安全と繁栄の確保に資すること(*2)」を目的に、政府開発援助 (ODA: Official Development Assistance) として、開発途上国に資金的・技術的な協力を実施してきました。

JICA は ODA のうち、国際機関への資金の拠出を除く、二国間援助の 3 つの手法である、「技術協力」、「有償資金協力」、「無償資金協力」を一元的に担っています。世界最大規模の二国間援助機関である JICA は、約 100 か所にのぼる海外拠点を窓口として、世界 150 以上の国と地域で事業を展開しています。

(*1)コロンボプラン: 南アジア・東南アジア・太平洋地域諸国の開発援助のために 1950 年に設立された国際機関。スリランカのコロンボに事務局がある。

(*2)2003 年 8 月改定、政府開発援助 (ODA) 大綱から。



「JICA PROFILE」から引用

JICA 兵庫の開発教育支援事業紹介

JICA 兵庫では、小・中・高校の児童・生徒および教職員を対象に様々なプログラムを用意しています。ぜひ、ご活用ください。詳しく知りたい方は、パンフレット「開発教育支援の手引き」をご請求ください。

なお、「開発教育支援の手引き」は、JICA 兵庫ホームページからダウンロードできます。
<http://www.jica.go.jp/hyogo/enterprise/kaihatsu/tebiki/index.html>

世界を知れば、「生きる力」に。JICA 兵庫が「考える場」を提供します。現場経験者だから響くコトバ！魅力ある授業づくりに JICA が協力します。

JICA 兵庫訪問プログラム・JICA 国際協力出前講座

JICA 兵庫 HP: <http://www.jica.go.jp/hyogo/enterprise/kaihatsu/index.html>

開発途上国での滞在経験を持つ講師による臨場感のある授業はいかがですか？学校での授業はもちろんのこと、校外学習(社会見学)、教員研修やスタディツアーの事前・事後学習会などに活用できます。一方通行の講義ではなく、参加型のワークショップを提供します。開催場所・内容・実施形態などは、ご相談ください。

実施時期: 通年

実施場所: 出前講座=学校や公民館など / JICA 兵庫訪問=JICA 兵庫

派遣講師: JICA ボランティア(青年海外協力隊・シニア海外ボランティア・日系社会ボランティア)OB/OG、JICA 専門家経験者、JICA 職員など



世界が教室にやってきた！世界の人々と触れ合う楽しさを体験。

JICA 海外技術研修員との交流

JICA 兵庫 HP:

<http://www.jica.go.jp/hyogo/enterprise/kaihatsu/demae/kouryu.html>

開発途上国から JICA が招へいた技術研修員を学校の教室に呼んでみませんか？研修員は、母国で行政官・技術者・研究者として勤務しており、各専門分野について兵庫で研修しています。JICA 兵庫は、JICA 国際協力出前講座の一環として、みなさんが国際協力を考えるきっかけになるよう交流の場を提供しています。

開催場所・内容・実施形態などは、ご相談ください。

実施時期: 通年(*本プログラムの対象コースと日程は、ホームページに掲載します。)

実施場所: 学校や公民館など

派遣講師: JICA 海外技術研修員(当日は、研修監理員が同行します。)



価値観を変える 10 日間。現場を見て、自分の言葉で世界を伝えてみませんか？

教師海外研修

JICA 兵庫 HP: <http://www.jica.go.jp/hyogo/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/index.html>

実際に海外の現場に足を運ぶことで、文献や映像では分からない開発途上国の現状を目の当たりにすることができます。現地の学校訪問、JICA 事業の現場視察や現地の人の生活状況を調査し、帰国後の授業実践に向けた材料収集を行います。

時期: 7 月下旬から 8 月上旬に海外研修

(応募要項など詳細情報は、ホームページにてご確認ください。)

対象: 開発教育(国際理解教育)に関心がある兵庫県内の教員及び指導主事

派遣人数: 8 人程度



JICA 兵庫の開発教育支援事業紹介

JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

JICA 兵庫 HP: <http://www.jica.go.jp/hyogo/enterprise/kaihatsu/essay/index.html>

国際社会の中で自分ができることは何かを考える機会を提供することを目的に実施しています。開発途上国の状況、ボランティア活動の経験、外国の友人からの学びなどを、自由にエッセイにしてみませんか？応募作品数は毎年増加傾向にあり、中高生の国際協力への興味・関心の高さを感じます。夏休みの課題として参加してみませんか？

開発教育指導者セミナー

JICA 兵庫 HP: <http://www.jica.go.jp/hyogo/enterprise/kaihatsu/shidousha/index.html>

「多文化共生のための開発教育・国際理解教育セミナー」

地球上で起こる様々な問題や異文化を理解するための面白い教材の紹介やワークショップの実践方法を学ぶ2日間の参加型セミナーです。毎年 80 人を越す参加があり、兵庫県内で開発教育を実践する教員間の情報交換の場としても役立っています。

時期： 8 月上旬

対象： 開発教育を実践中または興味のある教員、大学生、地方自治体職員や団体職員など



JICA 兵庫市民参加プログラム

JICA 兵庫 HP (イベント一覧): <http://www.jica.go.jp/hyogo/event/index.html>

まずは「見る、聞く、食べる、遊ぶ」ことから世界を感じてみませんか？

国際協力の経験、外国への渡航経験などは全く関係ありません。少しでも開発途上国や日本の国際協力に興味をお持ちの方は、お気軽にご参加ください。

見ることから始める国際協力「JICA 兵庫映画鑑賞会」

聞くことから始める国際協力「JICA セミナー」

食べることから始める国際協力「JICA 兵庫エスニック料理」



JICA プラザ兵庫 (広報展示室・資料室・食堂・ロビー)

JICA 兵庫 HP: <http://www.jica.go.jp/hyogo/office/plaza.html>

多くの市民の皆さんが訪れ、国際協力への興味や共感を育み、国際協力に参加する人々が増えること、また、地域で国際協力に関わる市民団体の情報発信や交流・研修の場となることを目指して開設しています。みなさん、お気軽にお立ち寄りください。

広報展示室には、事業紹介から始まり、そこから見える世界の文化や諸問題をテーマにパネルや映像を展示しています。その他にも国際協力にちなんだ様々な「見て、触って、体験できる」展示がいっぱいです。展示内容は定期的に更新しますので、JICA 兵庫ホームページをご確認ください。

資料室では、国際協力に関する書籍・映像資料のほか、授業で活用できる開発教育教材などが閲覧できます。市民団体の打合せスペースとしても活用できます。食堂は、どなたでもご利用できます。月替りエスニック料理が好評です。ロビーは、NGO/NPO などの活動紹介パネル展の会場として活用できます。





独立行政法人国際協力機構 兵庫国際センター（JICA 兵庫）

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1 丁目 5 番 2 号

TEL : (078) 261-0341 (代表) FAX : (078) 261-0342

<http://www.jica.go.jp/hyogo/index.html>